

菅原伝授手習鑑

初段

大序 大内の段

蒼々たる姑射の松化して芍薬の美人と頭はれ、珊々たる羅浮山の梅夢に清麗の佳人となる。皆これ擬議して変化をなす、あに誠の木精ならんや。唐土ばかりか日の本にも人を以て名付くるに、松と呼び梅といひ或は桜に准ふれば、花にも心天満つる大自在天神の御自愛ありし御神詠、末世に伝へてありがたし

この神未だ人臣にまします時、菅原の道真と申し奉り文学に達し筆道の奥儀を極め給へば、才学智徳兼ね備はり右大臣に推任あり、權威にはびこる左大臣藤原の時平に座を連ね、菅丞相と敬はれ君を守護し

誠には思ふまじ。御形代を拵へ天皇と偽つて唐僧に拝さすれば何事なう事は済む。誰彼と言はんよりこの時平が代りを勤め、袞竜の御衣を着し天子になつて対面せん」

と一口に言ひ放す謀叛の兆しぞ恐ろしき

菅丞相止め給ひ

「時平の仰せは天下の為御形代とはさる事なれども、もしやかの僧相人にて君臣の相をよく見るならば、王孫にあらぬ臣下と知るべし。その時いかゞ仕らん」

と暫しの間御思案あり

「所詮天子の御代り、人臣はなり難し。幸ひ御同腹の御弟齋世の親王を今日一日の天子と仰ぎ、御姿画を唐土まで伝へて恥じぬ御粧ひ。この儀いかゞ」

と理に叶ふ詞に

違ふ時平が工み、口あんごりと開きあたる玉簾深き一間より伊予の内侍立ち出で給ひ

奉る延喜の御代ぞ豊かなる

かゝる所へ式部省の下司春藤玄蕃の允友景まかり出で庭上に頭を下げ

「今度渤海国より来朝せし唐僧天蘭敬が願ひには、『唐土の徽宗皇帝、当今の聖徳を伝へ聞き、何卒天顔を拝し奉り御姿を画に写し帰国せよ。その画を即ち日本の帝と思ひ対面せん』との望みにつき、数々の贈り物即ちこれに候ふ」

と庭上に飾らすれば

菅丞相聞き給ひ

「コハ珍らかなる唐僧が願ひ。当今延喜の帝聖王にてまします事隠れなく、御姿を拝せんと唐の帝の望みは直に我国の誉れなれども、折あしき天子の御惱ありのまゝに言ひ聞かせ、音物も唐僧も唐土へ帰されんや。時平の了簡ましますか」

と仰せに

冠打ち振つて

「そふでない道真、御病氣と申し聞かしてもよも

「両臣の御争ひ、わが君詳しく聞こし召され、

『朕が代りは齋世の宮』と直々の勅詔にて只今御衣を召し替え給ふ。この由申し伝へよとの仰せにて候ふ」

と内侍は奥に入り給ふ

玄蕃の允が案内にて渤海国の僧天蘭敬、倭朝に変はる衣の衫、庭に覆ひて畏まる

「ム、唐土の僧天蘭敬とは汝よな。竜顔を写し奉らんと願ひ、叶ふは汝が身の大慶。ありがたく存じ奉れ」

と時平が指図に警蹕の声諸共に高々と御簾巻き上ぐるその内には、弟宮齋世の親王金巾子の冠を正し御衣さはやかに見へ給ふ、げに王孫の印とて唐僧始め座列の官人『アツ』とひれ伏し敬へり

天蘭敬漸々頭を上げ玉体をつくづくと拝し奉り

「ハ、ア、天晴れ聖主候ふや。我が国の徽宗皇帝慕はるゝも理りなり。三十二相備はつて言はん方なき御形、勿体なくも僕が筆に写し奉らん」

と用意の絵絹硯箱檜の焼筆さら／＼と、眉のかゝり額際、見ては写し書いては拝し、御笏しやくの持たせ様御衣の召し振り違ひなく、即席書きの速やかさ、顔輝が子孫か只ならぬ画筆の妙を頭はせり
道真公仰せには

「重ねて俸禄賜びてんぞ、旅館に帰れ」
と下知を受け継ぐ春藤玄蕃、御暇申させ唐僧を伴ひてこそ退出す

帰るを待つて時平の大臣玉座に駆け寄り、齋世の宮の肩先挿んで引きずり出だし御衣も冠もかなぐり／＼

「唐人が帰つたれば暫くも着せてはおかれぬ。九位でもない無位無官に着せた装束この冠穢れたも同然、内裏に置かず我が預かる。今日の次第は右大臣、奏問せられよ。身は退出まかり帰る」

と御衣冠奪ひ取つて行かんとす
道真立つて引き取り給ひ

「聊爾りやうじなり時平、勅もなき御衣冠私に持ち帰り過

と宣ふ詞は今の世に伝えて残る筆道の、道は御名に頭はれて真まことなるかな誠なる、君が御代こそ

加茂堤の段

引捨つる、車は松に輪を休め舍人二人は肱枕ひじまくし

二輛並べし御所車、かたへは藤原かたへは菅原、道真公の名代は左中弁希世、時平公の代参は三善清貫、加茂明神へ御悩の祈願、神子が湯立のその間眠るむまさは加茂堤、夢に夢をや結ぶらん

松吹く風に菅原の舍人梅丸目を覚し

「コリヤヤイ松丸、そちが主の時平公は短気者でも根が大鳥。名代にわたせた清貫殿は短いくせに根が悪者。呼び使ひを受けぬうち目を覚して往かいでな」

「ホウ梅丸の言はるゝことわいの。こなたの主の名代に来た希世殿こそ大邪人。蓼喰ふ虫も好き好きとあの和郎を弟子にしたり代参におこしたりな

つて謀叛の名を取り給ふや」

と何心なく身の為を言はるゝ身には胸に釘、頭歪めて閉口す

齋世宮菅丞相に向かはせ給ひ

「天子序ついでの勅詔には、『老少不定極まりなし。何時知らぬ世の中に名ばかり残すはその身の為、道を残すは末世の為。妙を得たる筆の道伝ふべき惣領は女子にしなれば是非に及ばず。幼ければ弟の菅秀才にも伝ふまじ。弟子数多ある菅丞相、器量を択えみて筆道の奥儀を授け長き世の宝とせよ』との御事」

と仰せの内に道真公

「コハありがたき君の恵み。わが筆法の大事には神代の文字を伝ふる故七日の物忌み七座ななざの幣、神道加持に唐倭からやまと、文字は何万何千にもわが筆道に洩れしはなし。それとも知らずこゝかしこに手習ふ子供も皆わが弟子。今日より私宅に閉じ籠もり択み出して器量の弟子に筆伝授け申すべし」

さるゝ菅丞相のお心が知りたい」

「イヤそりやその方達が小さい料簡とは違ふ。聖人の胸の広さはこちらが身にも覚えのあること。齋世の宮様の車を引く桜丸とわれとおれと三人は世に稀な三つ子。顔と心は変はつても着る物は三人一緒、ひよんな者産んだと親父が気の毒に思ふたをお聞きなされ、『三つ子は天下泰平の相、舍人にすれば天子の守りとなる。成人さして牛飼に差上げよ』と菅丞相様のおとりなしで御扶持まで下され、親四郎九郎殿は今佐太村の御領分に御寵愛の梅松桜を預かり安楽に暮してゐらるゝ。その御寵愛の三木の名を我々にお付けなされ、おれを兄のお心でか梅丸とお呼びなされて召し使はる。その方は松丸、桜丸は宮の舍人。烏帽子親といふ御恩のお方、家を隔てゝ奉公するとも必ず疎かに思はぬがよいぞよ」

「ア、ぐど／＼と長談義説く人よ」

「もう齋世の宮もお参りなされ、牛休めに桜丸も

来さうなものじゃ」

「ムなんぞ用があるか」

「ハテ佐太村の親父様から、来月は七十の賀を祝ふ程に三女みみょうと夫連れで来いと人おこされた。その事を言はうと思ふて」

「ム、ソリヤ銘々に人が来てよう知つてゐる。思へば親父殿は負はず借らずに子三人と果報な人ではあるはい」

と兄弟話のその中へ
同じ胤腹一時に生まれて年も同い年、どれが兄とも弟とも梅と松とに桜丸三幅対の車曳き、木蔭に一輛引捨て、堤の上から

「これはく二人ともゆつくりとしてみらるゝ。御神事もはや半ば過ぎ。呼び立てられぬうち往たらよかる」

と真顔で言へば

梅王丸

「御神事が済んだら宮様からお立ちであらうが、

「ハ、ハ、ハ、一杯喰ふて往たわく」

と独り言して合図の手拍子、招けば

招かれ恋草の菅丞相の御娘苺屋姫とて色も香も文は父御のお家柄

『口説き落して宮様に逢はせません』と跡につく、

供は八重とて花めきし桜丸が自慢の女房先へ廻りて

「コレこちらのお人、首尾はよいか」

と問へば

うなづき

「よいともく。今日この加茂堤は御車の休みどころ、人留めして一人も通さぬ。鼠の子もない所と思ひ宮様をそびき出して来たところに、梅王や松王めがどんぐり目玉にほつと草臥れ。一生に吐かぬ嘘を吐いてまんまと散らしてしまふた。姫君様、恥しそうな顔せずともおいでく。ドリヤ開帳仕らう」

と車の御簾を引き上げれば

齋世の宮は面映ゆげに

そちやまたこゝへ何しに来た」

「ア、イヤ、こちの宮様は神司かんづかさの方でご休息ある故お立ちの程が知れぬ。こなた衆の乗せて来た御名代の衆は禁廷の御用があるとして立ち騒いでゐたぞや。油断して叱られまい」

と言ふに

松王

「いかさま、役なしの宮様と時平公の御眼鏡で御用繁き清貫様とは違ふ。何時知れぬ、いざ往こ」と車にかゝれば

「ヤレ待て松王、清貫様がお立ちあればこの梅王がお供した希世の君も同然。万一お立ちでない時は、あの大勢の群集の中へ二輛の車を引きかけて怪我さしても損ねても不調法は舍人の誤まり。一走り往て様子を見て取りに帰るまでのこと。休んだ代はりぢや、サア来い」

と引き連れ立つて兩人は、宮居の方へ走り行く

跡見送りて桜丸

姫はなほしも顔見合はせ、につこと笑ふて袖覆ふ

「サア、こゝらが下々と違つて飛び付かして軽業もさせにくい。女房ども、暗闇にしたいなア」

「なんのいな。昼ぢやとて結構な車の内、われらは暫しお暇」

と木蔭へ這入れば

齋世の宮も十七の、いとまだ若き初恋に何と言ひ寄る品もなう

「桜丸がいかゝる世話、文見る度にいや増さり逢ひたかつたにようこそく。さぞ春風で寒かる」

と仰せは

姫の身にこたへ、春風よりも恋風がぞつと身にしむばかりなり

車の蔭より桜丸ぬつと首出し

「コリヤ女房、わが身抓つて人の痛さ。おりや先刻から死脈が打つ。早う配剤しをらぬか」

とせり立てられて

「オ、それく、春風でお寒いとおつしやる。憚

りながら御車を暫しのうちの風凌ぎ。御免あり
て」

と姫君を無理に抱き上げ押し入るれば
内には宮の御声にて

『嬉しいぞや』

睦言聞いて夫婦は飛び退き

「女房ども、たまらぬく」

「ア、コレ聞こえるわいの。お二人共に御機嫌よ
う、嬉しいことではござんせぬか」

「オ、その筈く、この中から手工合してお供の
衆には口薬、水撒く様に飲まして置いた。ヤその
水で思ひ出した、追付けお手洗ちやうす水が要るぞよ」

「そんならついこの川水を」

「ア、イヤ、コリヤ雨あがりで堤が滑る。怪我さ
しては晩から俺が不自由な。神前の水汲んで来
い」

「ソリヤまあどうやら勿体ない」

「大事ないく。王は十善神は九善、その王様の

弟御、九善片しぢや往て来い」
とせり立てられて

女房は、神前差して汲みに行く

『跡は気休め一休み』と思ふ所へ

三善清貫、官人仕丁に十手持たせ装束巻き上げ駆け
来たり

「ヤアそれにをる桜丸、おのれ最前齋世の宮をか
ねておのれが取り持ちにて、物ぐさい事聞いてゐ
る。最前から見るところが車の内に人こそあれ。

御簾引きちぎり改めよ」

と言ふに

従ひ立ち寄るところを

首筋掴んで投げ退けく

「車は舎人が預り物、命があらば寄つて見よ」

とかゝるを

蹴飛ばし跳ね飛ばし、十手もぎ取り片端なぎ立て

く追ふて行く

その間に宮と姫君は『人に見られて叶はじ』と、車

の内より飛び下りく、さすが若氣の一筋に逃れて
旅のかり衣、いづくともなく落ち給ふ
隙間を見て清貫が取つて返して車の内、引き明け見
れば内は空き殻

「南無三宝見違へた。舎人めが戻つたら大抵では
あるまい」

と下道さして逃ぐる跡

間もなく駆け来る桜丸、御二方の見へぬにびつく
り、車を見れば宮の書置き、

「なにく『見付けられて辱しめを受けうより立
ち退く』」

とある文章に、『ハツ』と驚き胸は板

「イデ追付いて御供」

と駆け行く

向ふへ女房八重

「サアこれ、お手洗水汲んで来た」

と見せるを

跳ね退け

「ナニ手洗水どころか。清貫めが車の内詮議せん
と来たりし故、見付けられじと二方はいづくとも
なう落ちなされた」

「ヤア、そりやマアほんか」

と女房はびつくり水桶落し

「シテまあこなたはこりやどこへ」

「ヤアどこどころか。元姫君は菅家の御養子、実
母は河内土師の里菅丞相の御伯母君、まづこの方

へ志し跡を慕ひ奉る。汝はあの御車を宮の御所へ
引いて行け。捨て置いては後日の咎め」

「成程さうぢや、こなさんの姿にやつして引いて

往こ。ドレ白張」

と受け取つて

「跡案じずとも行かしやんせ」

「オ、合点」

と白砂蹴立て飛ぶが如くにかかり行く

八重はやがて夫の姿、白張肩に引掛けて車の牛を引
き直し、させほせく精一杯、引けども遅き牛の足

「エ、どんくさい」

と後から押せば
車もくるくくと、『廻る月日は不成就日か、お二人様の凶会日か、夫のためには十方暮』、鬼宿車を押しかけて祈る心は八専の、黒日に間日の斑牛、追立てゝこそ

筆法伝授の段

立ち帰る

上根と稽古と好きと三つのうち、好きこそ物の上手とは芸能修業教への金言、公務の暇明暮れに好ませ給へる道真公、堂上堂下はいふに及ばず武家町人に至るまで風義を慕ふ御門人、数も限りもなき中に左中弁平希世、手習稽古ふる兄弟子、『今度筆法御伝授はさしづめわれらに極りし』と、勝手覚えし御殿の真中、朝の夜から机を直し、

「煙草よ、茶よ」

けて」

と差し出だす

「イヤ、今日は御赦され」

「赦せとはなせく」

「ハテ幾度お目にかけても丞相様の気に入らぬはお手の業ではござるまい。取次の仕様の悪さ、手代りに今日は勝野、そなたが持つておぢや」

「イヤコレさうはならぬ。筆法伝授も神道の秘密事、学問所の注連が目に見へぬか。脂こい女子はやられぬ。昨日までは気に入らずと、この清書は格別筆先に肉を持たせ、天晴れ骨髄を書き得たれば、伝授はずるく伸し切つてみてたもれ」
と頼むに是非なく立つて行く

「コレ勝野、局の言はれた『アイ、アイ』を合点か」

「アイ、心得てをりまする」

「エ、忝ない。幸ひあたりに人もなし、福德の三

と呼び立つる

声も届かぬ奥勤め女中頭が聞き咎め

「コレお次に誰もゐやらぬか。希世様の御用がある」

と呼び次ぐ局に不足顔

「コレ手の皮がひりつく程叩いてもしゝらしん。ムウ合点、顔出しせぬは毎日来るを面倒がり、言ひ合はせて鼻明かすのか。今日で七日この手習ひ、俺がためばかりぢやない。御子息の菅秀才は年弱七つ、伝授所へ行かぬによつてこの希世が伝授して菅秀才の成人以後身共からまた伝授。さすれば主の奉公も同じ事、ハツポと言ふて廻る筈。惣じてこなたがなまぬるこい」

「コレ勝野よう心得や。そなた衆の不調法、こける所は局が迷惑、何おつしやると『アイく』とな。申し希世様」

「成程さうぢや、よい料簡。毎日々々気を詰るも菅原の家のため。今日もまたこの清書、御目にか

年目、屏風の蔭でついちよこく」

と取る手を

振り切り

「エ、嫌らしい、無体な事なざるゝと声立つるが

合点か」

「オ、合点ぢや。声立つるが怖いとて仕掛けた恋人叶へおれ」

とほうど抱へて連れて行く

「アレくく申し」

「申しとは、誰に申し」

「御台様や若君様、申しく」

と言ふ声の

洩れ聞こえてや菅丞相の御台所、若君の御手を引き立ち出で給へば

希世は仰天

「コレハく悪い所へ、ようお出で」

と手持無沙汰もへらず口

「勝野に癩の療治を頼まれ、取りにかゝつてかく

の仕合せ。御台にもご存知の如く万能に達せし某、世に希な器用者として希世と付けたは親どもが自慢の名。その例はこの若君、年よりは御発明。菅秀才と呼び給ふも、秀はひいづる才は才智の才を取つて菅家の公達菅秀才。あら／＼謂はれかくの如し。われらは余り器用過ぎ取り損ふた按摩のしだら、御台所の思し召しが」

「ア、その言訳に及びませぬ。日頃の行儀知つてゐる。そんな疑ひ何のいな」

と物に障らぬ御挨拶

「ア、それ聞いて落ち着いた。今のしだらをついでながらお尋ね申す事がある。御息女の菫屋姫、齋世の君とにやほやした世間の取沙汰、今日で七日相詰る。御所には何の沙汰もない、虚説かと存ずれば菫屋姫の御殿は空家。御詮議もなされぬは親御達も合点の上、駆け落ちでかな／＼ござるか」

と問はるゝ辛さは御台所、しばし返事もなかりしが「隠しても隠されぬさがなき人の口の端にかゝる

れ」との仰せによりこの間所々方々と吟味致して、漸々只今夫婦一緒に参りたり。これへ通し申さんや」

と伺へば

御台所

「オ、待ち兼ねし源蔵夫婦、早々／＼へ参れと言へ。コレ菅秀才、源蔵に逢ふ間／＼にゐては気が尽けふ。勝野を奥へ連れて往て機嫌よう遊ばつしやれ。希世様にも暫しが間」

「オ、／＼にゐて邪魔ならば、所替へ仕らん」と続いて

奥にぞ入りにける。

人知れず思ひ初めしが主親の不興を受ける種となり、夫婦が二世の契りより三世の御恩弁へぬ不義より御所を追ひ出され、寒い暮らしを素浪人、尾羽打枯れし武部夫婦、今日の御召しは心の優曇華、開く襖の内外まで勝手は今に忘れねど

も是非なき菫屋姫。齋世の君はなほ以て大切な御身の上、互ひに忍ぶ恋路の車、廻り逢瀬もそこ／＼に事頭はれしを恥しく思し召され、御所へお帰りなされぬものとあつて、常の御方ならねば宮様付々の人々が、それなりけりにはして置くまい。また此方の娘の事は希世様も知つての通り、ほんの母様は河内国土師村の覺寿様とて連れ合ひのためには伯母御様、菅秀才を設けぬ先、乞ひ請けて養子娘。この御所へは戻られず、伯母様方へと心付き自らが内証で尋ねに人を遣はした。この一らくは今日が日までわざと父御へ知らしませぬ。それも何故勅諭にて、筆法伝授七日の内、参内止めて取籠り世の取沙汰は何にも知らず。伝授も過ぎて聞き給はゞさぞやびつくりし給はんと、彼方此方を思ひやる心を推量してたべ」と案じ給ふぞ理りなる

内玄関の奏者番、一間こなたに畏まり

「先年お館に相勤めし武部源蔵定胤、『尋ね参

身の誤まりに気遅れし、膝もわな／＼窺ひ足御台の御座を見るよりも、『ハツ』と恐れて飛び退り蹲りたるばかりなり

「ヤア珍しい源蔵夫婦、連れ合ひの氣に背きこの御所を出やつたを数へればもう四年、日頃人を捨て給はず慈悲深い程きつさもきつい。思ひ切つてはいかな事、見返らぬ夫の御心、叶はぬ事と思ひのほか、源蔵に参れとある御用の様子、何かは知らぬが氣遣ひな事ではあるまい、定めて吉左右。ヤ自らが言ふ事ばかり、さぞ待ち兼ねてござるである。『源蔵夫婦が参りし』と誰そ奥へお知らせ申しや。サア二人共に顔も上げ近う寄りや。ハアテ遠慮に及ばぬ、近う／＼。年月の浪人住居（ずまい）渡世が苦になつたか、昔の面影どこへやら。源蔵が着てゐやるは荒々しき下々の着る物。戸浪はそれに引替へて小袖の縫箔。さすがに女子の嗜みか、二人の中に子も出来たか」

と問はれて

戸浪はありがた涙

「ハア冥加至極もないお詞。主人の御目をくらませし罰が当つて苦勞の世渡り。夫婦が着替へも一つ売り、二つも三つも朝夕の煙の代になり果たし、漸々残せしこの小袖は御台様の下されし御恩を忘れぬ売れ残り。髪の毛の鬘くわんもいつかは櫛くしの引櫛と変はり果てたる共稼ともぎ。連合れんごうひは布子の上、糊立たぬ麻上下も今日一日の損料借。オ、オホ、ホ、ホ、ア、おはもじ。お上に御存じない事まで身の恥頭はす錆刀、今日まで人手に渡さぬ武士の冥加」

「アイ、女房が申し上げます通り、このさまに成り下がればひとしほ昔の不義放埒ふぎはな。思ひ廻せば主人の罰、悔むに詮方なき仕合はせ」

と夫婦諸共おろく涙。折から局は奥より立ち出で「『御学問所へ召しますは源藏殿たゞ一人。御用済んで御手の鳴るまで御台様にもお出ではならぬ』との仰せられでござります」

「成程々々心得た。源藏は局と同道、戸浪はこちへ」

と入り給ふ
只今御前へ召し出さるゝ源藏が身の嬉しさ怖さ、局はかくと申し上げ、立てたる障子明け渡せば、うやくしく注連しづな引き栄へ常に変はりし白木の机、欣然として座し給ふ凡人ならざる御有様
恐れ敬ふ源藏が五体の汗は布子を通し、肩衣絞るばかりなり
やゝあつて仰せには

「去り難き子細あつて汝が行方を尋ねしに、住み所定かならず。漸々昨日在り所を求め、今の対面満足せり。其方儀は幼少よりわが膝元に奉公し、天性好いたる筆の道、好くに上り習ふに覚え、古き弟子共追ひ抜き天晴れ手書きになるべしと、思ひのほかに主従の縁まで切れてその風体。筆取る事も忘れつらん」

と仰せに

猶も恐れ入り

「御返答申すは憚りながら、前髪立の時分よりお傍近う召し使はれ、『手を書く事は芸の司、書けよ習へ』と御意なされ、御奉公の間々書き覚えたと申すも慮外。蚯蚓みみずののたくつた様に書く手でも、芸は身を助けるとやら浪人の生業なまわざ。鳴滝村で子供を集め手習指南仕り、今日まで夫婦が命毛、筆先に助けられ、清書の直し字毎日書けども上らぬ手跡。お尋ねに預かる程身の不器用と御勘当、悔むに詮方なき仕合はせ」

と嘆くを
つらく聞こし召し

「子供に指南致すとは賤しからざる世の営み。筆の冥加芸の徳、申すところに偽りなくば手跡も変はらじ。改むるに及ばねども、こゝにて書かせ道真が所存は後にて言ひ聞かさん。認め置いたる真名と仮名、詩歌を手本に写し見よ」

と白木の机御手づから指し寄せ給へば

「ハ、ハーツ」

と先へは出でず後退り
志根しね悪の左中弁物陰よりずつと出で

「コレ源藏、様子残らずあれから立ち聞く。師匠の指図はともかくも辞退申して出る筈が、両手を着いて目をましくし、蟾蜍ひまがえの所作がらするは書いても見やうと思ふ気か。ア、それは野太い、叶はぬ事く」

「ハア、お馴染とあつて忝ない。希世様のお詞に一つも違はぬ役に立たず。しかし身の分際を顧みぬ源藏めでもござりませぬ。只今これにて書けとある御手本、書いてよいやら悪いやら後先の様子も存ぜず、四年以来在在所住居すまひ、臭墨に三文筆、書き出しや反古の裏に書けならば場打てもせまい。その結構な机に墨筆、大高檀紙の位に負け一字一点いっかないかな」

「ホ、よい了簡、いかぬと知つてなせ立たぬ」

「サアそこでござります。御勘当の私、御意に甘

へた身の願ひ、お取りなし頼み上げまする」

「ムウそれで聞こえた。詫び言はしてやる、が今はならぬ。と言ふその子細、ひつ摘んで話して聞けう。この度帝の仰せには、『存命不定の世の中、生死の道には老若差別はなけれども、マア年寄りから死ぬるが順道。菅丞相は当年五十二、天命を知るといひ齢も過ぎ寄る年を惜しませ給ひ、唐まで誉むる菅原の一流。これまで伝授の弟子もなし、一代きりで絶やすは残念。手を選んで伝授せい』と勅諭で七日の物忌み。殊の外お取込み、事済んでから願ふてやる」

「ハア様子段々承れば御大慶な勅諭」

「サアその勅諭も大慶もしれた事言はずとも、早々帰れ」

とせり立つる

「イ、ヤ立つな源蔵、言ひ付けた手本、只今書け」

と仰せは武部が身の大慶、希世は偏執むしやくしや

腹、立ち寄る源蔵睨み付け

「わりや兄弟子に遠慮もせず、書かうと思ふて出しやばるか」

「ホ、お笑ひあつても恥しからず。御免なれ」

と机にかゝり手本を取つて押戴き、心臆せず摺る墨の色も匂ひも香ばしき、筆の冥加ぞありがたき希世傍へ摺り寄つて

「わが様な横着者は手本の上を透き写し、その手目は身がさせぬ。恥と頭はかき次第、身のさまの恥面わりや何とも思はぬか。どてらの上に汚れ袴、机に直つてゐるさまは貧乏寺の講中、奉加場の帳付にそのまゝ、無縁法界を書くなよ」

と悪口たらだら言ひ散らし、怪我のふりにて机を動かし肘に障つて邪魔するも

構はず咎めず手本の詩歌快く書き終せ、机も共に前に直し退つて頭を下げ居たる

丞相清書を取り上げ給ひ

「『砂をきる草は只三分ばかり、木に跨る霞わづ

かに半段余り』、これは我が作れる詩。『昨日

こそ年は暮しが春霞、春日の山に早や立ちにけ

り』、これはまた人丸の詠歌。いづれも早春の心を詠みかなへり。仮名といひ真名といひ、これに勝れし筆やあらん。ホ、出来たりく。惣じて

筆の伝授といつば、永字の八法筆格の十六点。名をそれぞれに言ふに及ばず人々の知る所。菅原の一流は心を伝ふる神道口伝、七日も満つる今日只今、神慮にも叶ひし源蔵」

と御悦びは限りなし

「ハアありがたや忝ない。筆法御伝授あるからは御勘当も赦され前に変らぬ御主人様」

「ヤア主人とは誰を主人。伝授は伝授、勘当は勘当。格別の沙汰なれば不屈なる汝なれども、能書なれば捨て置かれず。私の意趣は意趣、筆は筆の道を立つる道真が心の潔白。叡聞に達しても依怙とは思し召されまい。希世にも疑はれな。勘当は前の如く、主でなし家来でなし。この以後対面

叶はじ」

と鋭き御声

源蔵が、肝に焼鉄刺さるゝ心地

「道理を分けての御意なれども、伝授は他へ遊ばされ勘当御免」

と泣き詫ぶる

「コリヤ源蔵が嘆くが道理、勘当を赦されねば伝授しても規模がない。彼が願ひも希世が望みも立つ様の了簡は、伝授と勘当かう替へくにして遣はされたら、好ささうな物の様に存じまする」

と言ふ折から

当番の諸太夫まかり出で

「『俄かの御用これある間、只今参内遊ばされよ』と滝口の官人参られし」

と申し上ぐれば

御不審顔

「七日の物忌み過ぎさる中、御用とは何事。隨身仕丁の用意せよ」

と装束の間に入り給ふ

参内と聞こし召し、立ち出で給ふ御台所、打掛の下に戸浪を押し隠し、人目包むも余所ながら『お顔をせめて拝ません』と心遣ひは希世が手前

「伝授の様子承れば、お前には残り多からう。仕合せは源蔵、さりながら御勘当は赦ぬげな。館の出入も今日限り、彼方此方を思ひやり御参内を見送りがてら、それでく」

と打掛の下を知らずする御目遣ひ

夫婦は重々お情けの身に沁みわたる忝け涙

東帯気高き菅丞相、一間の内より立ち出で給ひ、神道秘文の伝授の一巻源蔵に賜はりける、当座の面目御流儀、末世に伝へる寺子屋の敬ひ申し奉る因縁かくとぞ知られる

「サア伝授済むからは対面これまで。まかり帰れ、立てよく」

と頻りの御詫

「コリヤ源蔵、吠え面かいてももう叶はぬ。腰が

抜けて得立てずば引摺り出さん」

と立ち寄る希世
「ノウあられなく仕給ふな。三世の縁の切れ目ぢやもの、立たぬも理り嘆くも道理。涙止めて御暇乞ひ、見奉れ」

とかい取りの棲より覗かす戸浪が顔

『それぞ』と推し給へども知らず顔にて立ち出で給ふ、何としてかは召されたる御冠の自ら落つるを御手に受け留め給ひ

「物にも触らず脱げたるは、ハア、ハツ」

とばかり御気がり

「イヤ、それは源蔵が願ひ叶はず落涙いたす。落は落つると読むなれば、その験しるしでかな」

「イヤ、イヤさにてはよもあらじ。参内の後知れる事、源蔵早く帰されよ」

と冠正して参内ある

希世は怖々御見送り

御勘当の身の悲しさは行くに行かれず伸び上がり、

見やり

見送る御後影

御簾にさへられ衝立の邪魔になるのも天罰と五体を投げ伏し男泣き

戸浪が悔みは夫の百倍

「こなたは御前のお詞かゝり、直に御顔を見さしやつた。私は漸々御台様の後に隠れてまんじりと、御顔も拝まぬ女房の心、思ひやつても下されぬ、まんがちな一人泣き。同じ科でも此方は仕合せ。女子は罪が深いといふ、どうした謂はれでなせ深い、鈍な女子に生れし」

と御台のお傍も憚りなく、果てし涙ぞいぢらし

希世のさく立ち戻り

「ヤア源蔵を帰されぬは御台所御油断々々々」

『一刻も早くばいまくれ』と重ねて仰せつけられた。がそこを少し身が了簡。その代はりには伝授の巻物、読んでみる望みはない。筆の冥加にあやかるため、ちよと戴かしてくれんか」

と望むに是非なく懐より、取り出だすを

ひつたくり、逸足出して逃げ行くを

「どっこい、やらぬ」

と源蔵が、ぼつかげぼつめ襟がみ掴み、引摺り戻してかづき投げ、大の男に一泡ふかせ伝授の一巻取り返し

「これを汝おぬがひつかけうで直垂の羽繕ひ、昼鷲とらびの骨頂め。びくともせば打ち殺す」

と刀四五寸抜きかくる

「ア、コリヤ源蔵、聊爾すな。戸浪、過ちさするな」

と御詞かゝれば

「エ、おのれ、エ、おのれをな。たゞ助くるも残念な。寺子屋が折檻の机は此奴が責め道具。女房こゝへ」

と取るより早く背中せなかに机おほげなし、両手を引張る机の足、装束の紐ひつししぎがなじがらみに括り付

「盗みひろいだ師匠の躰、しつぺいの代り扇の親骨、面に見せしめひりつかせん」

と打ち立て／＼突き飛ばせば

痛さも無念も命の代り、恥を背負ふて帰りける

源蔵夫婦手をつかへ

「禁裏の様子承り帰りたく存ずれども、長居は恐れ」

「御台様、この上ながら夫婦が事、お捨てなされて下さりませぬ」

「オ、それは心得た。が『今行く』と言ふを聞き捨てに『せめて一夜』と言はれませぬ。命が物種、縁も尽きずばまた逢はう。ア、コレもう行きやるか」

「アイ、ア、イ、参りませねばなりません」

と戸浪が涙長汐に乾く間もなき袖の海、見る目いちらし夫婦が姿泣く泣く御門を

築地の段

出でて行く

源蔵と引違へ帰る梅王青息吐息、門の台木に足躓きかつぱと転けて起きる間も

「待たれぬ／＼侍衆、御大事が起つてきた。科の様子は何かは知らず、使の庁の官人ども、丞相様を取り回し鉄棒割竹アレ／＼こゝへ、御台様へこの様子を」

と館の騒動

門外には、鉄棒打ち振り警固の役人、輿にも召させ奉らず菅丞相の前後を囲み

先に進むは時平が方人三善清貫、門外に立ちはたかり

「齋世親王苜屋姫、加茂堤より行方知れず。子細御詮議なされしところ、親王を位に即け娘を后に立てんとする菅丞相が予ての工み。その罪遠島に相極まる。流罪の場所は追ての沙汰。それまでは

押し込め置き、出口々々に大貫鏝、門の警固は身が家来荒島主税を付け置く」

と呼ぶるゝ声を

聞く辛さ、御台は警固の人目も恥ぢず走り寄つて

「道真公、コハそもいかなる御事ぞや。物忌みの間の事、姫が身の上ご存知ない言訳はなぜなされぬ。科もない身を左遷との仰せは聞こへぬ恨めしや」

と嘆き給へば

「ヤア愚か／＼。道真虚名蒙れども君を恨み奉らず。漸々齢傾きし臣が拙き筆跡まで惜しませ給ふ伝授の勅諭。昨日までは叡慮に叶ひ今日は逆鱗蒙るとも皆天命のなすところ。先程むり冠の落ちたるは、殿上の札を削られ無位無官の身となる報せ。今更悔むは愚か／＼。これより配所へ行くにもあらず、見苦し／＼嘆かれな」

と御台を遠ざけ給ひける

希世は道より取つて返し

と割竹受け取り

「コレ謀叛人殿、今までとは当りが違ふ。時平公へ宗旨を替へた手見せの働き、割竹一つ」

と振り上ぐれば

血氣の梅王ずつと寄り、希世を四五間突き飛ばす

「ヤア下司の慮外者、自滅したうて出しやばつたな」

「ハレヤレ知れてある下司呼ばはり。こなたの口から慮外とはハ、ハ、ハ、腸がよれ返る。その割竹振上げて誰を／＼」

「オ、サ謀叛人のこのわちよを」
「ヤア謀叛とは誰を謀叛。御恩を忘れし人非人、
菅丞相にはお構ひなくとおのれに罰は身が当て
る」

とまた飛びかゝる梅王丸
御手を指し延べ引き寄せ給ひ

「ヤア小賢しい汝が振舞ひ。勅諭によつてかくな
る道真、希世はさておきその外へも手向ひするは
上への恐れ。汝は勿論館の者共、わが詞を用ひず
ば七生までの勘当ぞ」

と聞いて希世が怖気も抜け
「コリヤ梅王、して見ぬかい。頬げたばかりの腕
なしめ」

とのさばる無念

堪へる梅王

是非も情けも荒島主税

官人ばらに追立てられ、すぐく館に入り給ふ御有
様こそいたはしき

と言はせも果てず

高笑ひ

「女房あれ聞け、物覚へのない抜け作殿、伝授は
受けても勘当赦ぬ。この源蔵には主人がない。梅
王は主持ちでおのれめをさいなまず、耐へてゐる
可哀さに名代に投げてこました。名代ついでに皆
撫で斬り」

と女房諸共抜き放し滅多殴りの太刀風に

小糠侍鋸屑公家、吹き立てられて散り失せけり

敵なければ立ち帰る時節も幸ひ黄昏時、門の扉をと
んくく叩けば

内より答める声

「聞き覚えた梅王か」

「と言ふは武部源蔵殿か」

「殿どころかい、若い者油断してゐる所でない。
扉の釘付け踏み破り御主人たちの御供しこの場を
退くは易けれど、おことが今も聞く通り仁義を守
る道真公とあつて、讒者が計らひにて御家の断絶

「サアく用意の大貫鏝」
表と裏へ手分けの人数、築地の穴門樋の口まで暫時
の間に打ち付けしは物忌はしく見へにけり
清貫見廻し

「ハレよい気味、出口々々の締りもよいか。築地
の屋根を越さうもしれぬ。主税万端油断すな。暮
れに及ばゝ希世殿、いざ帰らん」

と打ち連れて六七間も打ち過ぐる

築地の蔭に待ち居たる武部源蔵ぬつと出で

希世を一当て悶絶させ

あはてる清貫相伴投げ

「スハ狼藉者打ちのめせ、殺せ括れ」

とひしめいたり

武部は戸浪に差添渡し寄らば斬らんず勢ひなり

希世は漸々人心地立ち上つて

「ヤア汝は源蔵め。一度ならず二度ならずひどい
目に合はしたな。汝がする狼藉、菅丞相がさした
になつて流罪の仕置が死罪になろ」

覚束なし。御幼少の御若君、夫婦が預かり奉ら

ん。所存を立つるはコレ梅王、若君をこつそりと

築地の上から」

「ホオくく出来たく源蔵殿、お上へ言ふて

は得心あるまい。盗み出だすが御家のため」

「さうじやくよい了簡、一刻一步も早退きた

し。頼むく」

と言ふ間もなく

築地の上から梅王が心の早咲き、勝色見せたる花の

顔ばせ

「大事の若君怪我さしますまい」

心得高き築地の屋根、伸び上がつても届かぬ背丈、

とやせん戸浪を抱き上ぐれば

軒に手届く心も届く

若君受け取り抱き下ろし

外と内とに忠臣二人、胸は開けど開かぬ御門

荒島主税目早く見付け

「ヤア盗人の隙はあれど守り人の隙がない。宵視

きめを手引きする内と外との相ずりめら、菅秀才
を盗んだこの旨注進せん」

にけり

と駆け出す

先に源蔵が、立ち塞がつて

「どこへく、おのれをやつてよいものか」

と討つてかゝれば

抜き合はせ、切り結び

切りほどこき

追つゝかへしつ二人が勝負、屋根の上から見てゐる

梅王棧敷正面真向二つ破れて命は荒島主税

「とゞめに及ばぬ切り捨てく」

危い場所を

盗人夫婦、行く末栄ゆる菅秀才

「若君頼む、夫婦の衆」

「館の父君母君を、頼むぞ梅王」

「心得た」

と互ひに頼み頼まるゝ、忠義々々を書き伝ゆる筆の
伝授は寺子屋が、一芸一能名も高き人の手本となり

二段目

道行詞甘替

「サアく子供衆、買ふたりく、飴の鳥ぢや飴
の鳥。それが嫌ならしる飴鑿切、泣く子の口へは
地黄煎玉。さてその外平野飴、桂の里には桂飴、
西の宮には飴の金、その品々は往て買ふたり。拙
者が自慢で売り弘める桜飴を買はつしやい、桜
飴々々」

桜々と己が名を言へども包む頬かぶり、木綿頭巾に
袖なしの羽織は軽き身なれども、忠義は重き牛飼の
桜丸はいつぞやより、加茂の川浪立ち出でし齋世の
宮と姫君に漸々と廻り逢ひ、一日二日は我が家にも
忍ぶに何と菅原の伯母君頼み参らせんと、行くは車
の供ならで後と先とに打ち荷ふ、飴の荷箱の片々
に、御二方を入れ参らせ浮世を土師の里へとて、飴
のとりどり売りに行く心遣ひぞせつなけれ

道を芹川淀も越へ町を過ぐればこゝぞよし、誰かは
何と石清水

「サアくお出」

と荷を下ろし、箱を開けば

うづ高き姿あらはに苧屋姫、暫く拝む日の影に目馴
れぬ山や知らぬ里、思ひなくてぞ見まほしゝ

「ノウ宮様」

とありければ

「さればとよ、そなたの父菅丞相いかなる事の誤
りにや、押込めの身となりけるも我々出でし後な
る故、正しくは知らねどもやがて赦されありぬべ
し。兎にも角にも我れが身は今売る飴の如くに
て、笠に覆へる日影の身、いつか解けなん心ぞ」
と御仰せに

桜丸

「左様にては候はず。御忍びましますも飴をば上
に君を下、取りも直さず天が下しろし召す瑞相に
て候ふ」

と申し上ぐるに

宮は猶、『勿体なし』と身をすべる

野路の畔道そろくくと、蕨が裾に手を入れて棲ひるがへす裏模様、留木に草も芳しき春の野面に群れる蝶、袖にとまらば羽摺りて鏡絶やせし化粧せん

こゝに我が名を仮屋の里、今苗代の時を得て民の手業も遠目には、いと珍らかに引鶴の声に千歳も変らじと、契りし今の閨の内宵よりしめて寝る夜さは、月が出るやら曇るやら

枕取る手に寝て解く帯のいかお世話く、枕取る手に寝て解く帯のいかお世話く、結ばぬ夢を覺ませとや春の風

ぬるみし空の快く、行く手の森の人音に見付けられじと手ばしかく、また忍ばする飴売が片手に太鼓片手に撥、声おかしくも拍子取り

「こんりやく／＼こりやく／＼、これは天子の始めなされた神武飴とて、神武天皇は飴がお好きで練らしやりましたる名物飴をば、こちも仕習ふて鼻等

安井汐待の段

哀れさよ

世につれて海の面も風騒ぐ、湊に御船を留めしは菅原の道真公、つひには讒者の舌強く、覺へなき身に罪極まり筑紫宰府へ流罪の籠船津の国安井に着きしかば

警固の武士は法皇の旧臣院の庁判官代輝国、逢坂増井に陣幕打たせ見る目厳しき鍵長刀

数多の官人四方を囲ひ、出船を松の下蔭に日和見合はせぬたりける
かゝる折から桜丸

「宮姫君を御供申し、先に進んで馳せ来たり」菅丞相御流罪と承り縁類の者暇乞ひの願ひまた一つは科の様子も承りたし。御役人へ直談」

と立ち寄るを

数多の官人

や嫁等が紅絹の襷をしんどろもんどろ掛けて、しんどろり、もんどろりと練りやりましたを買ほなら今ぢやく／＼」

と売り声の

子供集めに子の親が、袖の土産を買ひに来て認める間の取り沙汰に

「惜しや都の菅丞相筑紫へ流され給ふ故、津の国安井に風待ちしておはしまするはいたはし」

と所縁と知らず告げて行く

後の驚き悲しみは箱を細目に顔ばかり

「ナニ道真は左遷とや」

「父上安井にましますとや。せめてお顔が拝みたい、どふぞお船の出ぬ先に逢はせてたも桜丸、頼むく」

もしどろにて、『わつ』とばかりに泣き給ふ

声をも人に知らせじと喇叭の笛に紛らして、それより道を横切れに一荷の涙担ひ行く、先はいづくぞ津の国の安井の岸の安からぬ、思ひ重ぬる

「ヤア直談とは慮外者、暇乞ひとは無法者。油断ならず」

と取り巻くを

それと悟りて輝国

「ヤレ聊爾すな」

と押し鎮め

「科の様子聞きたくば言ふて聞かさふ。上より咎めの条々つぶさに言ひ聞き給へども、齋世の宮と苧屋姫密通の言訳ご存じなきとてあかり立たず。是非なく科に落ち給ふ」

と聞いて悲しく苧屋姫

宮諸共に駆け出で給ひ

「ナニ我々故囚とや。情けなや浅ましや。不義は二人が誤りぞ、流しなりとも切りなりとも罪に行ひ丞相を助け得させよ」

「父上に逢はせてたべ助けてたべ」

「対面させよ」

と二方は泣き叫び給ふにぞ

輝国遙かに頭を下げ

「恐れながら御対面あつてはいよく丞相の罪重くなる道理。元この起こりは去る頃、君天子になり代り御姿を唐僧に写させしは菅丞相の計らひ。唐土まで天子と思はせわが娘を後に立て外戚とならん下工と讒者の舌にかゝる内、宮姫を連れ御出奔。いよくそれと叡聞に達し、罪なくして罪に沈む。殊に姫君とは親子の仲、これ天子への恐れあればよもや対面候ふまじ。とかくこの上菅丞相の為を思し召さば、これより苧屋姫と御縁を切られ再び禁庭へお帰りあつて、謀叛なき趣を仰せ分ければ丞相帰洛を御願ひ候へかし」

と申し上げれば

齋世の宮

「われ故罪に沈むも悲し。また我をのみ恋ひ慕ひ付き添ひ来たる契りをば見捨て、何と去なれうぞ」

と託ち給へば

暫しの間のお別れ御聞き入れ下されよ」

と身にかゝつたる切なさに、土にひれ伏し願ふにぞ齋世の宮は猶涙、姫君に差し向ひ

「われ恋草の思ひに迷ひ丞相の帰洛を願はずば天道怒り給ふべし。契りは尽きず変らねども親の為と諦めて別れてたも、苧屋姫」

と涙と共に宣へば

「コハ勿体ない。御嘆きを掛けるも元は自ら故、いつそ焦がれて死んだらば今の思ひはあるまいに、お名残惜しや」

と御顔を、見るも涙見らるゝも涙片手に

「また逢ふまでは随分まで」

「お前様にもご機嫌で」

と後は涙の縋り泣き、『わつ』と絶え入り給ひけるかゝる折節いづれとも知らぬ女中の乗物釣らせ、おめず臆せず判官代に差し向かひ

「私事は土師の里立田と申して菅丞相の伯母の

姫は尚更

「父の為には仇敵、われを罪して御流罪を赦してたべん々」

と伏し沈みく消え入るばかりに泣き給へば

「思へばく我なくばこの恋誰か取り持たん。科人も沁み渡り

「思へばく我なくばこの恋誰か取り持たん。科人はチエ、外ならず」

と悔やめど今更詮方も涙先立つばかりにて、とかふ詞もなかりしが

立ち直つて宮の御傍に恐れ入り

「私元は土百姓の倅、御扶持を下され君の舎人を勤むるも皆菅丞相様のお蔭。その恩ある方を流罪させのめく見てはゐられず、と申してから我々風情の及ばぬところ。輝国殿の仰せの如く、これより姫君と御縁をお切りなされ他人となつてお願ひあらば、よもや叶はぬ事もござりますまい。再び丞相様御帰洛あつての後、表向きの御縁結び、

娘」

と聞くに嬉しき苧屋姫

「コレ姉様ノウ、立田様かいの」

と取り付き給ふを

突き退け跳ね退け

「母の寛寿、左遷の様子を聞き及び年寄つての悲しみ。御推量下さりませ」

と言ふ内に

また姫は取り付き

「そのお嘆きが身にとつて猶悲しい」

と嘆くを

振り切り

「何卒この所の汐待を土師の里にて御一宿あら

ば、快く暇乞ひも致したき願ひ。明日をも知らぬ老ひの身の少しは嘆きも止めたく無体な御訴訟。

夫宿祿太郎が参る筈なれども郡役を勤める身で身勝手な事申すも如何。女の慮外は常の事と不調法も顧みずお願ひに参りし。御役人の御了簡、偏に

頼み上げます」

と願へば

輝国

「イヤ一家の願ひ叶はぬ事。大切な囚人、波打ち際の一宿心許なく只今用心の為土師の里へ立ち越する。一宿は覺寿の元」

と聞いて嬉しく

「エ、それはマア結構な御用心」

と悦び勇む立田が袖

姫はひかへて

「コレ申し、とても事に父上に御目にかゝる御

願ひ」

と頼む袂を

振り放し

「恐れ多い、丞相様へどの顔下げて逢ふと思し召すぞ。元あなたに菅秀才といふ御子のない先、母様がお前をば藁の上より遣はされ私が為に妹でも今は菅原の姫君様。勿体ない宮様へ恋仕掛けて今

この大事になつたでないか。恋は心の外でもなこれはあんまり外過ぎて姉のわしまで人々へ顔が出

されぬ。恥かしい」

と叱る心も同胞のさすが誼と知られける

輿の内には菅丞相、わざと詞を掛け給はず

事を量るは判官代

「コリヤヤイ桜丸、何をうつかり。一時も早く宮を法皇の御所へ御供申せ。立田殿は苧屋姫を御同道は必ず無用、ナ合点か。コレサ土師の里の親元へきつとお預けなされよ」

と表を立て、心は情け

御乗り物はゆるやかに常の旅行同然に、輝国が引添ふて土師の里へと急ぎ行く

「ノウコレ父上」

「丞相」

と宮諸共に駆け行き給ふを桜丸が引き留め立田が押さへて引き分くる、名残り尽きせぬ妹背の別れ扇の別れとさすがまた、姉が情けで引き合は

す、いとゞ思ひは増井の浜目は泣きはらす赤井の

水、いつか安居と逢坂の水の別れや泣き別れ

「さらば」

「さらば」

と

杖折檻の段

菅丞相の御別れ、対面ありたき覺寿の願ひ、流人預かる判官代輝国の用捨をもつて河内の屋敷へ入り給へば

老いの悦び大方ならず馳走の役人夜昼の分ちも知らぬ忙しさ

立田前は船場にて思はず逢ふたる苧屋姫、密かに伴ひ帰れども家来も多くは知らぬがち、隠し置いたる小座敷の襖をそつと押し開き

「さぞ淋しからう精も尽けふ。顔見に來たいは山々なれどさりとは何やかや用事の多さ。母様

の傍離されねば得参らぬ。今がよい隙、誰も來

ぬ、気晴らしにサコゝへ」

と心遣ひも姉妹の姉の情を

苧屋姫、一間を出づる目は涙

「斎世様に別れてより段々お世話に預かる上、父上様にもお目に掛かりせて不孝の申し訳、それも叶はぬものならばとわが身の覺悟極めて、生みの母様覺寿様、今の母様都の弟、親王様の御事はなほしも忘れぬ得忘れぬ。心を推量してたべ」と嘆けば

共に涙ぐみ

「悲しいは道理々々、さりながら丞相様に逢はぬとて短気なことなど構へて思ひ出しても下さんすな。母様のお願ひ立つてこの屋敷に御逗留、どうぞ首尾を見繕ひ母様のお耳へ入れ、お指図受けてと余所ながら口むしりかけて見たればな、こちの思ふた坪へはいかず、母様の堅くろしき。お果てなされた郡領様に少しも変はらぬ行儀作法。『わ

が産んだ子でも人にやれば先こそ親なれこちは他人。それを親ぢやの娘ぢやと思ふは町人百姓の訳をば知らぬ子に甘さ』と幸先悪い訴訟もならず、ほかの事に言ひ紛らしその場は済んでも始終が済まぬ。お宿申すも今日で三日、時化空も吹き晴れて下り日和に直つたと船場から注進故、今宵八つがお立ちとて輝国殿の旅宿より知らせによつてお立ちの用意。今やなんとと思ひの外、手詰めになつたがどうしてよからう。膝とも談合、コレ泣かずとよい知恵出して下さんせ」

と取つゝ置いつの胸算用

後にすつくと宿祿太郎

「よい分別者これにあり」

「ヤア太郎様、いつの間に」

「ム、』いつの間に』とはコレ立田、連れ添ふ男の目を抜いてこつそりと取り込んで大それた身の上話。苧屋姫はそなたが妹、藁の上から養子の子細、知つてはゐれど京と河内。武家と公家とは位

「オツト閉口、往て来う」

と表の方へ出でゝ行く

後を見やりて苧屋姫

「あなたがお前のお連れ合ひ、身の上の事に取り

紛れ御挨拶も得申さぬ」

「ア、コレ挨拶はいつでもなる事。こちらの願ひは延ばされぬ、ア、どうがな」

と案じ煩ひ

「オ、それく、所詮母様に言ふたとて埒のあかぬは知れてある。連れ合ひも留守、母様もお傍にござらぬ折柄なればお前を私が連れて往て、叱られうがどうならうが後は儘いな、サこなたへ」

と姫の手を取る後より

『不孝者、どつちへ行く』
と襖ぐはらりと母の覚寿、杖振り上げて飛びかゝるを

立田は『ハツ』と抱きとめ

「お前に明けて言はなんだ、隠したお腹が立つな

も格別、菅丞相の伯母風吹かし婿めかしても、いつかなめかれぬ位負け。名ばかり聞いて逢ふたは今、ヤてんと御器量。斎世とやら様とやらがうつゝ様にならしやつたも道理ぢやく。姫の顔見ぬ先はおれが女房は楊貴妃ぢやと思ふたが、比べて見れば無楊貴妃、そなたの名も変へねばならぬ」

「ソリヤまたなんとへ」

「ハテ知れた事、お次の前」

「エ、ずはくゝと出放題、母様へも隠してゐる。

この訳なんとも言はしやんすな」

「それは氣遣ひし給ふべからず。明日のお立ち知らされし輝国の旅宿へ参り、この間御逗留心遣ひの一札申し、いよく刻限相違なく一番鶏の鳴くのが合図。『申し合はせに往て来い』と覚寿の言ひ付け。只今参る道でよい思案が出たらコレ戻つて言はう、お次の前」

「アレまだじやらく悪戯口」

らばこの立田、打ちも擲きもなされませ。この中も宣はぬか、人にやればわが子でないと仰しやつての折檻は、母様とも覚えませぬ。丞相様の御秘蔵姫、杖棒当てゝよいものか。サ自らをく」

と姫に代はつて身を厭はず

「イヤお前に科はない、不孝な自ら打ち給へ」

と立田を押し遣る杖の下

「イヤくお前は打たされぬ」

「イ、ヤこな様は」

と折檻の、杖を争ふ姉妹思ひ

老母は猶も怒りの顔色

「コリヤ立田、おりや他人には折檻せぬ。養子にやつた丞相殿は俺が為には甥の殿、子にやつた姫は甥孫。親も赦さぬいたづらして大事のく甥の殿、流され給ふは誰が業。憎ふてくコレこの杖折れる程擲かねば丞相殿へ言ひ訳立たぬ。六十路に余つて白髪頭、連れ合ひに別れた時刺るを刺らさぬ立田前、尼になつては頼りがない力がないと

留められて、法名ばかり覚寿と呼ばれ邪魔に思ふたこの白髪。今日といふ今日役に立つた。頭を剃つて衣を着れば打擲の杖は持たれぬはい。傍杖望む立田から」

と走り寄つてちやうくくく

打たるゝ姉

妹打つ母も、共に涙の荒折檻

『ア、コレく伯母御前、卒爾の折檻し給ふな。

齋世の君の御不憫ある娘に疵ばし付け給ふな。父をゆかしと慕ひ来る苧屋姫に對面せん。これへ伴ひ給はれ』

と障子の内より丞相の御声高く聞こゆるにぞ

老母は杖をからりと投げ捨て、『わつ』と叫んで伏し転び暫し答へもなかりしが

「生みの親の打擲は養ひ親へ立つる義理、養ひ親の慈悲心は生みの親へ立つる義理、甘き詞も打擲も子に迷ふたる親心。逢ふてやろとは姫よりも母が悦び、詞には言ひ尽されぬ。ア、結構な親持つ

た」

持つたくと目に持つた涙の限り声限り、二人の娘は何事も

「お慈悲」

「お慈悲」

とばかりにて、泣くよりほかの事ぞなき

「コレノウウコから礼を言はうより、来いとあればいざ傍へ」

と隔ての襖押し明ければ、菅丞相は見え給はず、逗留の中作られし主の姿の木像ばかり

「コハそもいかに」

と苧屋姫

「逢ふてやらうと宣ひしは母様の折檻を留めんため。とにかく不孝な自ら故、お逢ひなされて下されぬか。今物を仰つたは父上に違ひはないに木で作りし父上様が但しは物を宣ひしか、またはどこぞへ隠れてか」

と立つて見居て見うろくく

「ノウ騒がしや苧屋姫、丞相の逗留中御馳走申すは奥座敷、ここへは余程間数も隔たり、先程声のかゝつた時、『ここへはどうしてござつた』と思ひながら嬉しさに弁へなく見ればこの木像ばかり。ついでながら苧屋姫、話して聞かさう。逗留の中に主の像、描いてなりとも作つてなりと伯母が形見に下されと願ふた日から取りかゝり、初手に出来たは打ち割り捨て、二度目に作り立てられしを同じくこれも打ち碎き、三度目にこの木像作り上げて仰るには、前の二つは形ばかり、精魂もなき木偶人。これはまた丞相が魂残す形見として下されし主の姿。物を言ふまいとも言はれず、帝への恐れあれば逢ひたうても逢はれぬ親子、木とな思ひそ苧屋姫。物仰つた父上に逢やつてさぞ嬉しかる、母も本望遂げました」

と親子三人悦びの中へ

のさく立ち帰る、太郎が父親土師兵衛

「覚寿、これにをはするか。お客人のお立ちも明

朝、出立の拵へさぞ取り込み。役に立たずと御見舞ひ申し、手伝ひでも仕らうと参りがけに輝国殿の旅宿へもちよと付け届け。倅が幸ひ居り合はせ用意も大かた出来たと聞き、まづは大慶。とかうする内もう暮相、ひとまづ帰つてお立ちの時分、また参るのも老足なればお邪魔ながらこれに居る。心遣ひなし下されな」

「オ、兵衛殿の義理々々しい。嫁子のところは内同然、断りに及ぶことか。用があらば遠慮なく仰つたがよいわいの。刻限まではコレ立田、そなたの部屋にお寝間を取りや。後程お目にかゝらん」

と姫を連れ立ち入り給へば

後は親子が小声になり

「コリヤ、道々諺し合はした通り太郎ぬかるな」

「氣遣ひなざるな親人」

と奥と部屋とへ別れ行く

座敷々々は燭台照らし、今宵限りの御奔走、とりどり騒ぐ

東天紅の段

ばかりなり

士師兵衛は一間よりそつと抜け出で前裁せんざいの、勝手覚えし切戸口錠捻ぢ切つて押し開けば、外から合図の挟箱差し出す中間ちゆうかん徒士若党

「コリヤヤ言ひ付けた人数の装束丞相を迎ひの張輿はりこ、スハと言ふ時間に合はせ」

と家来共先へ帰し挟箱引抱へ、月影漏るゝ木の間くくうそくく窺ふ同腹中

「親人、お首尾は」

「コリヤ、シイ」

「件の物は参りしか」

「倅、氣遣ひ仕るな。コリヤの中に計略のかの一物、大事の談合サ、こゝへ、こゝへ」

と大庭の池の辺りで囁く親子

宵から素振りに氣を付けて宿祢太郎に目放しせず立

田前が物陰より

聞くとも知らず宿祢太郎

「先程お聞きなざるゝ通り、判官代輝国迎ひに参るは八つの上刻、時平公よりお頼みの菅丞相を殺す工面、贗物仕立て迎ひと偽り受け取つて途中でぐつとはいふものゝ、一番鶏どりが歌はねば姑の片意地、名残惜しんで渡されまい。八つ鶏の鳴かぬ先に宵鳴きする鶏、これにあるか」

と挟箱より取り出だし

「ヤ皮膚の好い白相国しろあひだて、とかうする内もう夜中。

一調子張り上げ存分に歌うてくれ、一声聞かねば落ち着かぬ。サア鳴けくエ、鳴けやい。親人、何故鳴きませぬの」

「イ、ヤその分では鳴かぬ筈。宵鳴きは天然自然、極めては鳴かぬもの。それを鳴かすが秘密事、大竹の中へ煮湯にえゆを入れその上に留まらずれば陽氣の廻るを時節と心得時を作る。留まり竹も挟箱に入れて来た。台子だいすの湯もたぎつてある、釜口

そつと取つて来い」

「ホ、取つて来るは易い事。が湯を仕掛けても鳴かぬ時は」

「テぐどくく、鳴かぬ時はまた分別」

と親子が巧み

「南無三宝一大事、先へ廻つて母様へお知らせ申して、イヤさうしては、イヤ言はいではまたこちらが言ふてはあちらがこちらが」

と心迷ひし胸撫で下ろし

「宿祢様、太郎様はいづくに」

と尋ぬる声に

『ハツ』と二人が廃忘怪顛はいぼうけだん、鶏隠す挟箱あたふた閉めてさあらぬ風情

「ヤア事々しう呼び立つるはなんぞ急な用でもあるか。さもない事なら無遠慮千万。親人もこの宿祢も肝に堪えてびつくりした」

と言ふ顔

つれづれ打ち眺め

「お前方のびつくりよりわしにびつくりさゝしやんした。聞こえぬ連れ合ひ舅君、贗迎ひを拵えて菅丞相殺さうとはあなたになんぞ恨みがあるか、但しは時平に頼まれし、欲には馴染みの女房も捨て母様の義理も思はずか。お前は捨てる心でもわしや得捨てぬ太郎様、コレ申し親父様、思ひ留まつて下さりませ」

と舅を拝み夫を拝み、声も得立てぬ貞女の思ひ、涙操を頭はせり

兵衛は宿祢に目配せし

「イヤハヤ、親身の異見に逢ふて親も倅も面目ない。向後心改める。嫁女、この事聞き流しに」

「ア、勿体ない、聞き流さいでもよいものか。御得心とあるからはこの世ばかりか未来迄変はらぬ夫婦舅君、まだ如月の余寒も激し、炬燵たきごに膚温め酒、一つ上げたいサアお出で」

と先に立田が

「ソーレ、ソレそこを」

心得太郎が後袈裟

肩先四五寸切られながら、振り返つて掴み付き

「エ、コレ人でなし卑怯者。一人の手にも足らぬ者、欺し殺しが本望か。女の義理を立て過ごし悔しや無念」

と罵る声

「おとぼね立てな」

と宿衾が下着、褌先口へ押し込み捻ぢ伏せ肝先ぐつとひと袂り

兵衛は前後に心を配り

「倅、息は絶えたか」

「氣遣ひ召すな、只今とゞめ。さてこの死骸は」

「問ふに及ばぬこの大池、骸を浮かさぬ手ごろの石、袂や帯に括り添へ深みへやれ」

と二人して投げ込む死骸は紅の、血汐に染むる池までも立田が名をや流すらん

「コレ親人、これはこれでも済まぬは鶏、台子の湯を取つて参らう」

「太郎、それにはもう及ばぬ。鳴かず仕様は身共に任せ」

と武士の嗜む懐中松明手ばしかく灯し立て、池の中へ明りを見せ挟箱の蓋あをのけ鶏を上に乗せ、浮かめる池の水の面、刀の鐙差し延ばす腕一杯に押し遣れば

動かぬ水も夜嵐に立つや小波のうねりにつれ、半段ばかり流れ行く

「ハ、親人々々何をなさるゝこと、挟箱の蓋を船にして子供のする業おとなげない、あれがく

あれがなんの役に立とハ、ハ、」

「コリヤ」

「ム、ハ、ハ、」

「ア、若い、訳を知らずば言ふて聞けう。惣別渕川へ沈んで知れぬ死骸は鶏を船に乗せて尋ねれば、その死骸の在り所で時を作る。鶏の一徳思ひ出し池へ沈めた立田が死骸、今一役に立てゝ見る旨い手番ひ。拍子まんが直つて来た。アレく

太郎、羽叩きするは死骸の上か。そりやこそ鳴いたは東天紅」

「アリヤまた歌ふは東天紅」

八つにもならぬ宵鳴の声冴えかへる春の夜や、庭木の時に羽叩きして、「鶏鳴けば万鶏歌ふ、函谷関の関の戸も開く心地に親子が悦び

「これから急ぐは菅丞相、迎ひの拵え気が急ぐ」

と兵衛は出で行く切戸口、宿衾太郎は巧みの仕残しだめを

丞相名残の段

聞かして出でて行く

『はや刻限ぞ』と御膳の拵へ、銚子土器熨斗昆布、腰元共に島台持たせ伯母御座敷へ出で給ひ

「百日千夜留めたりとも別るゝ時は変はらぬ辛

さ。この上頼むは御免の勅詔、帰洛を待つこの島台、行末祝ふ熨斗昆布」

菅丞相もこの間心遣ひの御一礼

互ひに尽きぬ御名残り

宿衾太郎罷り出で

「御立ちの刻限とてはや門前まで迎ひの官人、判官代輝国は路次の用心辻固め、只今旅宿を立ち申され興阜の官人に譜代の家来をあひ添へられ、只今これへ参上」

と怪しの張興阜き入れて

「時刻移る」

とせり立つる

菅丞相は悠々と大広間より出でさせ給ひ輿に召すまで見送る老母、人前作つてにこくと、泣かぬ別れぞ哀れなる

宿衾太郎も御見立て、門送りして立ち帰り

「ヤレ、ヤレ、嬉しや仕廻ひがついたぞ。覚寿様もお気休め、寝間へござつて」

「イヤ寝たうても寝られぬわいの」

「寝られぬとは御気色でも」

「アレまだいの。客を立て、嬉しいと一道な婿殿の悦び。一つ屋敷にみながらの暇乞ひも得せいで。お屋敷が悲しかる、人の逢ふのもけなりかると、かけ構はぬ立田さへそれでわざと呼び出さなんだ。が機嫌よう立たしやつたを悦びにはなぜ来ぬぞ。ソレ誰ぞ往て見てこい」

と言ふに

きよろつく宿祢太郎

腰元共は立ち戻り

「奥にござるはお屋敷只お一人、立田様はござりませぬ」

「なんぢやぬ。内を離れてどこへ行きやろ。今一度見て来い座敷の隅々かぐれく、尋ねく」と吟味の厳しさ

提灯手ん手に若党中間、幾人あつても行き届かぬ花壇築山手分けして、尋ぬる奥の池の端、柴に溜つた生血を見つけ

「ヤコリヤくこの血の流れ込む池を捜せ」

が因果でおぢやるは」

とかつぱと伏して正体なし

太郎傍へ立ち寄つて

「涙が死人のためにはならぬ。女房共への追善には殺した奴を引張り切り。これにて詮議仕らん」

と縁端に大胡座

「男女に限らず家来の奴ばら片端から詮議するぞ。マアとつ付きにをる宅内め、身が前へ出あがらう」

「ナイ、ナイ、ナイ」

と御前にかつ蹲ひ

「エ、人は知らず、拙者めに御疑ひはござない筈。お死骸を取り上げた御褒美を下されうで一審にお呼び出し、忝ない儀でナイ、ナイくくご

はりまするでござります」

「ヤア禍々しい褒美とは横着者め。立田が死骸池にあるを汝はどうして知りをつた。サそれぬかせ」

と声々に

水心得た奴共、飛込みく水底よりかづき上げたる立田が死骸

驚き騒ぐ家内の騒動

太郎は鼻も動かさず

「殺した奴は内にある。詮議済むまで門打つて家来共動かすな」

と喚き散らせば

母覚寿

姫もかしこへ転び出で

「コハ誰人の仕業ぞや。先からお顔を見なんだは、伯母様のお傍にと思ひ設けぬこの死骸。父上には生き別れ、お前には死に別れ、時も変らず日も変らず悲しさ辛さ一時にかゝる例もあることか」

と老母に取り付き悔み泣き

「オ、道理々々。そなたはおれが傍にと思ひ、おれはそなたが傍にゐると思ひ違ひが娘が不運、母

「ア、イヤアノ尻も頭も見やう筈はござりませぬ。池の深みへ芝から伝ふた血を証拠に」

「ヤアぬかすない、提灯の灯明りでそれがそれと知れるものかい。うぬが殺して沈めた池、ほかの者がどうして知らう。ハア血の分では言訳立たぬ」

「イヤこれはお旦那無理仰る。言訳立たうが立つまいが、池が血へ流れ込んだその他は存じませぬ」

「ヤア池が血へ流れたとは血迷ふてナ、なにはさく。きやつ詮議場で水くらはせ白状さす。ソレ引立て」

と宿祢も続いて立つところを
老母押し止め

「イ、ヤ責めるに及ばぬ詞のてんでん。ア、嬉しや娘の敵が知れたわいの」

「ハア『責めな』とは天晴れお目高。科極まつた罪人、女子共へ手向ける成敗大袈裟に打ち放す。」

腕を左右に引張れ」

と刀引提げ立ち寄る宿禰

「イヤコレ婿殿、成敗は常の科人、袈裟に切つてはたゞ一思ひ、苦痛させねば腹が癒ぬ。娘の敵初太刀はこの母。後は婿殿、刀を借り」

と甲斐々々しくも棲引き上げ、向ふ目当ては奴にあらず

油断太郎が弓手の助、突込む刀に

宅内は命拾ふて逃げて行く

宿禰太郎は急所を刺され、もがき苦しむ息の下

「身共になんの科あつて、ム、老いばれめが」

と言はせも果てず

「ヤア覚えなとは言はさぬく。わが科を人に塗り成敗をして見せだて、裾ばせ折つた下着の棲先切れてある、その切れはコリヤ立田が口。サ声立てさせぬ無理殺し、齒を噛みしめ放さぬ棲先切つたことを打ち忘れ、おのれが科をおのれが頭はず極重悪人。死骸の前で敵を取る、母が娘へ手

向けの刀、肝先へこたへたか」

と大の男を仕留める老女、さすがに河内郡領の武芸の形見残されし、後室とこそ知られければやゝ時移れば

「判官輝国只今これへ御出で」

と家来が申すに

老母は驚き

「丞相は先程お立ち、誰を迎ひに。心得ぬことながらこの方へ通しませい。苅屋姫は奥へ行きや。

こいつはまちつと苦痛をさす」

と刀をそのまゝ身体押し退け、出で迎へば

輝国も早や入り来たり

「御迎ひの刻限、御用意よくば早や御立ち」

と申す詞の

先折つて

「輝国殿、何仰る。丞相の迎ひにはその家来が先程見へ、受け取つて帰られたはもう一時も前のこと」

「ヤコレく伯母御、身が家来に渡したとはかたがた以て心得ず。鶏の声に刻限はかり只今鳴いた

旅宿の鶏、八つに参る迎ひの約束。家来といはうがじきに身共が参つたとて、刻限も来たらず鶏も鳴かぬ先『渡した』と言ふては済むまい。船がゝりのその間、伯母御に逢はずはこの輝国が情の容赦。今日の今になつて、名残りも一倍島へはやらぬ『渡した』と言へばそれで済むと鼻の先な女子の了簡。菅丞相の仇にこそなれ為にはならぬ、イヤコレ偽りな申されそ」

「イ、ヤ偽りは申さぬ。庭で鳴いた鶏の声、そこへござつた迎ひの衆、渡したに違ひはない。が受け取らぬと仰るので娘が最期、婿めがあつた様。思ひ合はせばさつきに来たは贖迎ひ」

「ヤコレく伯母御、内の騒動死人のある上、贖迎ひ嘘ではあるまい。護者共の仕業であらう。一時違へば三里の遅れ、追付いて取り返さんと急ぎに急いで駆け出す輝国

『ヤアく判官まづ待たれよ。菅丞相はこれにあ

と一間より出で給ふ

覚寿はびつくり

「さつきに別れた菅丞相、そこにはどうして

くく」

と不審の立つも道理なり

判官輝国打ち笑ひ

「ぬけくとした伯母御の偽り暫時の仰天。丞相これにましますば輝国が安堵々々。見へ渡つたこの御難儀、訳も聞きたし。力になつて進ぜなければ、私ならぬ警固の役目。早や刻限も移りぬれば、いざ御立ち」

と勧むるところへ

「先程見へた警固の役人、たつた今門前まで」

「なんぢや警固が、よい所へ戻られた。嘘吐かぬ覚寿が証拠、これへ通し輝国殿へ見せませふ」

「ア、イヤ身が名をかたつた贖役人、直に逢ふて

は悪しかるべし。忍んで様子を窺はん」

と丞相諸共一間の障子、引き立て内に隠れゐる

輿に先立つ警固が大声

「コレく老母、輝国の名代とけ侮り、とでもな
いもの身共に渡しようぬつけりさゝれたの」

「これは迷惑、菅丞相を受け取りながら『とでも
ない』とは何仰る」

「アレまだぬつべり。丞相は丞相でも木で作った
はこつちに要らぬ、肉付の菅丞相、替へる気で持
つて来た木像、コリヤこの輿に」

と言ふに

覚寿も心付き

「エ、忝ない。さては魂を込められし木像であつ
たかい。猶も証拠を見届けん」

と心の悦び押し隠し

「こなたの言ひ分合点がいかぬ。その木像見せさ
つしやれ」

「オ、しやちこぼつた荒木作り。サア今見せう」

と開ける戸の

輿に召したは木像ならぬ

優美の姿菅丞相、につこと笑ふて立ち出で給へば

警固はぎよつと呆れ顔

覚寿も違ひし心当て、障子の内と今見る姿心どぎま
ぎ疑ひながら

「ア、よう戻して下さつた。確かに伯母が受け取
りました」

「ヤアどこへく。そりやならぬくとは言ふも
のゝ連れて帰つて見たのは木像、すり替へられた
と気がついて替へに戻つたこゝではほんのコレ菅
丞相。おらが目の悪いのか、見所によつて変はる
かい」

「イヤ変はらうが変はるまいが戻された菅丞相、
いざこなたへ」

と立ち寄る覚寿

「ヤア野太い」

と突き飛ばし丞相をまた輿に乗せ、戸を引立てゝ家

来に向かひ

「コリヤわいらも様子を見る通りいかにしても怪
しい事共、この分では帰られず。念のため家捜し
する」

と踏ん込む先に

宿祢太郎、半死半生のた打つ苦しみ

「南無三宝、太郎様が切られてござる、且

那々々」

と呼ぶ声に

警固の中から親兵衛、前後も更に弁へず走り寄つて
引き起し

「コリヤく、倅、この深手はド、どいつが仕
業、相手を知らせ」

と気を急いたり

「ノウ兵衛殿、相手は姑、ア、わしが手にか
け

「ヤア婿を手にかける落ち着き自慢、何科あつて身
が倅を」

「ヤアとぼけさしやんな、あひやけ殿。そいつが
立田を殺した時こなたも手伝ひしやろがの。娘の
敵切つたがなんと。鷹迎ひの棟梁殿、なにもかも
頭はれ時、さつぱりと言ふたく」

「エ、残念々々、倅めが出世を思ひ時平公に一味
して菅丞相を殺さんため、鶏に宵鳴きさせ十が九
つ仕終せた兵衛が手だて。腐り婆めに嗅ぎ出され
殺された倅が敵、覚悟ひろげ」

と飛びかゝるを

「ヤアさはさせじ」

と判官輝國小蔭より頭はれ出で、覚寿を囲ふて突立
つたり

「ヤアどなたが出てもびくともせぬ。兵衛が巧み
の破れかぶれ、死物狂ひの働き見よ」

と切つてかゝれば

かいくゞり持つたる刀踏み落とし、利腕掴んで引つ
くりかへし、足下に踏み付け大音声

「ヤア輝国が家来共、鷹者めらを片端から括れ

く」

と言ふ声に
初めの擬勢ぬけく」に、一人も残らず逃げ失せたり
覺寿はとつかは輿の戸の、明くる間さぞやお氣詰り
と、内を見れば

『コハいかに』

形見の木像

またびつくり

『これはいかに』

と立ち帰り、こなたの障子押し明くれば

『伯母御、騒がせ給ふな』

と菅丞相の御詞

こゝでもびつくりかしこでも、びつくりびつくり心に
の迷ひ

「どちらがどうぢや輝国殿、目利きなされて下さ

れ」

と問はるゝ人も

問ふ人も、呆れ果てたるばかりなり

丞相重ねて

「輝国の迎ひ遅参故、まどろむともなく暫時の
間、物騒がしく聞こえし故、窺ひ見れば兵衛が巧
み太郎が仕業。立田の前ははかなき最期、是非も
なし。伯母御の心底さこそく。某これへ来た
らずばかゝる嘆きもあるまじ」

と今更悔みの御涙

「イ、ヤ、娘が命百人にも替へ難き大事の御身。

怪我過ちのなかつたを悦びこそすれなんの泣こ、

なんのく」

と言ふ目に涙

「ノウ輝国殿、悪事の元はその兵衛、この世の暇
を早うく、太郎も共に」

と立ち寄つて髻引き上げ

「丞相の堅固の有様、おのれ親子に見せたが本

望。娘が恨みも晴れつらん」

と刀を抜けば

息絶えたり

「エ、憎いながらも不憫な死に様。有為転変の世
の習ひ。娘が最期もこの刀、婿が最期もこの刀、
母が罪業消滅の白髪も同じくこの刀」
と取り直す手に髻払ひ

「初孫を見る迄とたばひ過した恥白髪。孫は得見
いで憂き目を見る。娘が菩提、逆縁ながら弔ふこ
の尼、種々因縁而求仏道、南無阿弥陀仏」

と唱ふれば

菅丞相も唱名の、声も涙に回向ある

判官輝国大きに感じ

「伯母御前に先取られ、跡に退つたおのれが成
敗、強欲非道の黷頭」

と水もたまらず打ち落す

覺寿は木像抱き抱へ、菅丞相の右手の方、御座を並
べて直し置き

「兵衛親子が巧みも頭はれ、何もかも納まりし。

この木像の不思議な働き、かゝる例もあることか
や」

「いやとよ。最前も言ふ如く匹夫々々が巧みも頭
はれわが急難を遁れしも、暫時の睡眠前後を知ら
ず。木に刻み筆に画く例は本朝名高き絵師巨勢の
金岡が書いたる馬は、夜な夜な出でて萩の戸の萩
を喰ひ、唐土にも名画の誉れ、呉道子が墨絵の雲
竜雨を降らせし例もあり。また神の尊像木仏など
の、人の命に代はらせ給ふ例は数へ尽くされず。
菅丞相が三度まで作り直せしものなれば、木にも
魂備はつて我を助けしものやらん。讒者のために
罪せられ、身は荒磯の島守りと朽ち果つる後の世
まで形見と思し召されよ」

と仰せは外に荒木の天神、河内の土師村道明寺に残
る威徳ぞありがたき

輝国四方を打ち眺め

「思はざる儀に暇を取り、夜も明け放れ候へば御

立ちぞふ」

と申すにぞ

また改まる暇乞ひ

「伯母が寸志の餞別せん、用意の物こなたへ」
と菀屋姫の上着の小袖、掛けたる伏籠諸共に御傍近く取り直させ

「浪風荒き揖枕余寒を凌がせ申さんため、伯母が心を焚きしめた小袖を島まで召さるゝ様に、輝国のお世話ながら頼みまする」
とありければ

「これはよろしき進ぜ物、苦の香防ぐ留め木の小袖、家来に持たせ参らん」

と立ち寄り伏籠に手をかくる

丞相『暫し』と止め給ひ

「御恩を厚く込め給ふ伏籠に掛けしこの小袖、中なる香はきかねども銘は大方伏屋か菀屋。伯母御前より道真が申し受けし女子の小袖、わが身には合はぬ筈。身幅も狭（き罪人がたゞこのまゝにお預け申す。わが小袖と思し召し立田の前が追善の仏事も共に」

と伯母御前の心を悟る御詞

骨身にこたへ忍び兼ね、思はず『わつ』と声立て、
嘆くに

『さては』と輝国も、心を感じ萎れ居る

覺寿の心は伏籠の内

「泣いたは結句あの子がため、別れにちよつと只

一目、伯母が願ひをかなへて」

と立ち寄る袖を

引き止め

「御年故の空耳か今鳴いたは確かに鶏。あの声は子鳥の音、子鳥が鳴けば親鳥も鳴くは生ある習ひぞ」

と心の嘆きを隠し歌

「鳴けばこそ別れを急げ鶏の音の、聞へぬ里の暁

もがな」

と詠じ捨て

「名残りは尽きず御暇」

と立ち出で給ふ御詠歌より、今この里に鶏鳴く羽叩きもせぬ世の中や

伏籠の内を洩れ出づる、姫の思ひは羽抜け鳥、前後左右を囲まれて父はもとより籠の鳥、雲井の昔忍ばるゝ左遷の身の御嘆き

夜は明けぬれど心の闇路、照らすは法の御誓ひ

道明らけき寺の名も、道明寺とて今もなほ栄へまし

ます御神の生けるが如き御姿、こゝに残れる物語

尽きぬ思ひに堰き兼ねる、涙の玉の木櫛樹、数珠の数々繰り返し、嘆きの声に只一目見返り給ふ御顔ばせ、これぞこの世の別れとは知らで別るゝ別れなり

三段目

車曳の段

鳥の子の巢に放れ魚陸うぐに上るとは、浪人の身のたとへぐさ

菅丞相の舍人梅丸、主君流罪なされてより都の事ども取り賄ひ、御台の御行方尋ねんと笠深々と深緑、土手の並木にさしかゝれば

向ふからも深編笠、われに違はぬその出で立ち互ひにそれぞと近く寄り

「梅丸か」

「これはく、桜丸、ヤレそちに逢ひたかつた。マア話す事、聞く事あり」

と兄弟木陰に笠傾け

「サテまづ問はう、その方はいつぞや加茂堤より宮姫君の御跡慕ひ尋ね行きしと内宝八重の物語。なんとお二方に尋ね逢ふたか」

と拳を握り歯を喰ひ締め、先非を悔いたるその有様梅王も『理り』と、暫し詞もなかりしが

「才、道理々々。われとても主君流罪に逢ひ給ふ上は都に留まる筈なけれど、御館没落以後御台様の御行方知れず、まづこの方を尋ねうか、筑紫の配所へ行かうかとつおいつ心は逸れど、その方が言ふ如く年寄つた親人の七十の賀の祝ひもこの月、これも心にかゝる故思はず延引えんいん。互ひに思ひは須弥大海、是非もなき世の有様」

と兄弟顔を見合はせて、涙催す折からに鉄棒引いて先払ひ

「先退いて片寄れ」

と雑色ざしきがいかつ声

梅王立ち寄り

「どなたぞ」

と尋ねれば

「本院の左大臣時平公、吉田への御参籠。出しやばつて鉄棒喰らふな」

「成程、道にて追付き奉り、菅丞相御流罪と聞くより対面なさしめ奉らんと、安井の岸まで御供せしに御対面叶はず。輝国殿の計らひにて御帰洛願ひの妨げとお二方の御縁も切られ、姫君は土師の里伯母君の方へ御出で。斎世の宮様は法皇の御所へ供奉し奉り、事納りしと言ひながら、納らぬは我が身の上。冥加に叶ひ御車を引くそのありがたい事打ち忘れ、賤しい身にて恋の取り持ち、つひには御身の仇となり宮御謀叛と讒言の種拵へ、御恩受けたる菅丞相様、流罪にならせ給ひしも皆この桜丸がなす業と思へば胸も張り裂く如く、今日や切腹明日や命を捨てうかと思ひ詰めたは詰めたれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人並べてみると当春より喜び勇みおはするに、われ一人欠けるならば不忠の上上不孝の罪。せめて御祝儀祝ふたと、詮なき命今日までもながらへる面目なき。推量あれ梅王」

と言ひ捨て、急ぎ行く

「何と聞いたか桜丸、斎世の宮菅丞相を憂目に逢はせし時平の大臣、存分言はふぢやあるまいか」

「成程々々、良い所で出つくはした」

と兄弟道の左右に別れ、尻ひつからげ身構へし、今や来たと待ちあたる

程なく轟く車の音、商人旅人も道をよぎる時平の大臣が路次ろじの行粧ぎょうじょう

さながら君の御幸みゆきの如く、隨身青侍せいじ前後に列し大路狭しと軋きらせたり

兩人木陰を飛んで出で

「車遣らぬ」

「車遣らぬ」

「車遣らぬ」

と立ち塞がる

「ヤア何者なれば狼籍する。見れば松王が兄弟梅丸桜丸。ム、ム、聞こえた。主に放れ扶持ふちに放れ気が違ふての狼籍か。但しはまたこの車時

詰寄る兄弟三人

互ひに残す意趣遺恨、睨んで左右へ

茶筌酒の段
ちやせんさけ

別れ行く

春先は在々の鋤鋤までが楽々と、遊びがちなる一物作り、一番村では年古き人に知られし四郎九郎、律義一遍取り柄にて菅丞相の御領分、佐太に手軽き下屋敷お庭の掃除承り、松梅桜御愛樹に培ひ水の養ひも根が物作りの鍛仕事、わが身の老木厭ひなく幹を肥やしの百姓業、畑の世話より気楽なり
堤端の十作が鋤打ちかたげ門口から

「四郎九殿、内にか」

と這入るを

見付け

「コリヤ十作、畑へか」

「ア、イヤ、今仕舞ふて戻つたりや、鼻が言ふに

「それは目出度い、ついでながら問ひましょ。三つ子生むと扶持下さるその謂はれも聞かしやつたか」

「サイノ、死んだ鼻が生んだ時は辺り隣りの外

聞、ひよんな事ぢやと思ふたがもつけの幸ひ。三

つ子の父親一代は作り取りの田地三反、コリヤコ

レ日本ばかりぢやないげな、唐までもさうぢや

て。男の子なりや御所の牛飼ひ、女郎なれば東

童とやら、これも御所で遣はるゝ法式は忝ないも

の。旦那殿は流罪なれどおらは所も追立てられ

ず、下された田地はそのまゝ。そちの鼻も若い程

に産すならおらにあやかりや」

と話の中道

辿り来るは桜丸が女房八重、今日は舅の祝ひ日とて

風呂敷包み片手に提げ

「嬉しやこゝぢや」

と笠取れば

「ホ、桜丸が女房八重か、早かった。他の嫁

はなにやら目出度い祝ひぢやて、大きな重箱に眼へ入る様な餅七つ、朝茶の塩にも喰ひ足らねど貰はぬよりは忝ない。礼も言ひたし、祝ひとはマアなんでござる」

「サイノ菅丞相様のふつて湧いた御難儀。お下に住むおらゝが身祝ひどころぢやなけれど、せにやならぬさかいでするはするが、世間へも遠慮があるで彼岸団子程な餅七つづゝ配つたは、この四郎九郎丁七十。この春年頭の御礼に上つた時おらが年をお尋ね、『七十』と申したりや、『古来稀な長生き。その上珍しい三つ子の父親。禁裏から御扶持下され俸共は御所の舍人。めでたい、生れ月生れ日生れ出た刻限違へず七十の賀を祝へ。その日から名も改め』とてノウ聞かしやれ、伊勢の御師なんぞの様に白太夫とお付けなされた。すなはち今日が誕生日、白黒まんだらかいは掃き溜めへ放つて退け。今日から白太夫といふ程に、さう心得て下され」

御も揃ふて来るか。マア上つて抱へも解きや」

「アイ、まだ皆様はお出でないか。遅かると気が急いで淀堤から三十石の飛び乗り、船の足の早いで草臥れもせず早よ来たが仕合はせでござんする」

「コレ四郎九殿、お客さうな。もう去にましょ」

「エ、四郎九郎とは物覚へがない十作。白太夫ぢや、忘りやつたか」

「イヤ忘れはせぬわいの。餅の祝ひとは格別、名酒呑まねばいつまでも四郎九郎」

「ハレヤレ盛つた酒を呑まぬとは、但しはまだ呑み足らぬか」

「イエぬけくと嘘言ふわちよ。おらに酒何時盛つた」

「オ、さつきに盛つた。樽や徳利は目に立つ故、餅の上へ茶筌の先で酒塩打つてやつたので、二度の祝ひは済んだぢやないか」

「ア、それで聞こへた、鼻が酒臭い餅ぢやと言ふ

た。外へは遠慮でさうしやるとおらは懇ろだけ、
晩に来て寢酒一杯。お客、これに」

と出て、行く

「ハ、嫁女あれ聞きやつたか。今の世の人はき
めごまかでおらが始末の手目見付けて晩に来て寢
酒たべう。ハ、ア、せち賢い懇ろ振り」

「イヤまたお前もあんまりな。聞きも及ばぬ茶筌
酒、ホ、ホ、」

「ハ、ハ、」

「ホ、ホ、」

「ハ、ハ、」

「ホ、ホ、」

「ハ、ハ、ハ、ハ、」

と嫁と舅の睦まじさ

梅王松王兄弟の女房が来る道草も、女子の手業筈に
摘む込み蒲公英嫁菜枸杞の垣根を目印に

「サ、こゝぢやお春さん、マア先へ」

「イヤ、千代さんから」

と相嫁同士が門での辞宜合ひ
白太夫をかしがり

「エ、一時に産んだ三つ子の嫁共、先の後のどこ
ろかい。八重が疾うから待つてゐやる。どちこち
なしに這入れく。ヤ来たく、来たくくく
ハ、ハ、」

「ほんに八重さん早かった。ござんする道なれば
春が所へ誘ふても下さんしよかと、待つた程が遅
なはつて心急ぎな道すがら、千代さんに行き合ふ
て連れ立つて来る道悪戯。今日の祝ひのしたしに
と嫁菜蒲公英二人の仕事」

「それはよう気が付いた。春さん誘ふ約束も日足
の長けたに気急ぎして寄る事も忘れたに、お千代
さんとは良い出合ひ」

「サイナお春さんに逢ふたはわしが仕合はせ、賑
やかな道連れ。それはそれぢやが親父様、料理の
拵え出来てあるかへ」

「イヤ出来てない、わゝ女たちにさす合点。こて

く、とむづかしい事は要らぬ。今朝搗いた餅で雑
煮しや。上置きはしれた昆布、隙の要らぬ様に茹
でて置いた。大根も芋もそこにある、勝手は知る
まい、ヤアえい、えい」

と立ち上げば

「イヤ申し、今日の祝ひはお前が目当て、料理方
の出来るまでなんにも構はずひと寝入りなされま
せ。勝手知らねど三人寄つてなにもかも取り出だ
す」

「さうぢやて、立つたついで、棚な物下ろしてや
ろ。ドレ、ドレ、これ見や、祖父の代から伝は
つた根来梔ぢや。折敷も十枚、おらが息災なもこ
の梔折敷。コレ堅地なとて構へて手荒う当るな嫁
女達ハ、ハ。このマア倅共は何故遅い、来るまで
にひと軒」

と体を横にさし枕、堅地作りの親父なり

「コレ皆様。なんぼあの様に仰つても雑煮ばかり
では置かれぬ。飯も焚かざるまいし、なにはせ

いでも鯉なます、道草の嫁菜お汁による。八重
さん千代さん頼みます、この春は飯仕掛けう」
と手ん手にまな板すりこ鉢、米炊桶に量り込む水入
らずの相嫁同士、菜刀取つて切り刻みちよきく
くと手品よく、味噌する音も賑はし、

白太夫目を覚まし

「コリヤ倅共はまだ来ぬか。正月から知れてある
おらが祝ひ日、油断せう筈はないが、アこの中誰
やらオ、それく、今去んだ十作が話には時平殿
の車先で三人の子供が大喧嘩、『聞いてか』と知
らしてくれた。喧嘩の様子噂達は知つてゐよ。車
先での事とあれば時平殿に奉公する松王が女房。
サ、ハ、へ来て様子を言や」

と名指しに合ふたは千代が迷惑

「お祝ひ事の済むまではお前の耳へ入れぬがよい
と三人ながらその心、要らぬ事喋られて隠されね
ば申します。梅王様桜丸様、二人の相手にこちの
人、日頃の短気言ひ上つて兄弟喧嘩。したがお気

遣ひなされますな。三人ながら怪我もなくその場はそれで済んだれども、もちやくちや言ふてゐられます。春さん、八重さん、お前方もさうである。気の毒な男の不機嫌」

「成程々々、お千代さんの言はんす通り今日の祝ひを言ひ立てゝ兄弟御の仲直し。親御のお詞、かゝらいでは」

と男思ひの壁訴訟

「エ、わごりよ達に問ふたら知れうと思ふた喧嘩の筋、知つてゐても言はぬか。ア、同じ胤腹一時に生れた倅でも心は別々。よう似た顔を双子と言へどそれもそれには極まらぬ。女夫子もありまた顔の似ぬ子もある。マア大概顔が似れば心もよう似て兄弟の仲もよいものぢや、がおらが倅共は誰が見ても一作とは思はぬ。生ぬるこい桜丸が顔付、理屈めいた梅王が人相、見るからどうやら根性の悪さうな松王が面構へ。ヤ、コリヤ千代が傍で粗相言ふた、気に掛けてたもんなハ、マア

猶予もなり難く、俄に盛るやら箸打つやら椀の向ふの小皿に「まめ

「まづ一番に親父様、これでお座りなされませ」

と給仕はもとより習はねど、見馴れ聞き馴れ立ち振舞ひ、八重が配膳御所めけり

「イヤ俺もあそこへ往こ」

「イヤ申し、土間では冷えが上ります。やつぱりこゝで」

と押しそなへ、これから面々夫の給仕膳を捧げて庭に下り

「この梅の木が梅王殿、杖ぶりずんと日頃の氣質」

「八重が連れ添ふ男ぶり、木ぶりも吉野の桜丸」

「これは千代まで添ひ遂げる女夫が中の若緑、色も艶々勢ひよい。松王殿で子達も揃ふ、サア親父様、目出度うお箸なされませ」

「ア、なされうともく、親がひに座が高い。子供どもへドレ挨拶」

く怪我がなうて嬉しうをりやる。怪我ついでに孫めはまめなか、連れて来て顔見せいで。とかう言ふ中もふ七つぢや、俺が生れたは申の刻限、料理も大方出来たである。嫁たち、膳を出さぬかい」

「アイ、アイく、刻限の過ぎるまで連れ合ひ衆はなせ見へぬ。千代さん、八重さん、道まで往て見て来まいか。こゝで待とより三人ながらござんせ往かう」

「エ、噂達何言ふぞい、子供共は来てゐるわい」

「エ、来てぢやとはどこにく」

「エ、鈍な嫁共、そこにゐるを得知らぬかい。コレ三本のあの木が子供ら。梅王、松王、桜丸、顔は残らず揃ふてある。勿体ない菅丞相様、くゝめる様に言はしやました。生れ日の刻限が違や悪い、祝儀には蔭の膳も据える習ひ。サアく早う」

と白太夫が言ふに

「ハテもふそれには及びませぬ。お加減の冷めぬうち」

「イヤくお春、そふでおぢやらぬ。親でも子でも極まつた辞宜作法」

と庭に下りるもまめやかに木の前に畏り

「子供衆、何もござらずともよう参つて下さい。親が折角下りての辞宜、ア、コ、辞宜返ししたうても動かれぬは知れてある。こゝで、こゝで、こゝで、こゝで、ハ、ハ、ハ、噂達、餅をかやいの」と尻もちついて

「ハ、ハ、ハ」

悦び笑ひ

わが膳に押し直り、箸を取るより

「ア、さて塩梅ぢや、旨いく。三人の嫁女達、給仕も片意気せぬ様に三杯は喰ふ合点でおぢやらしまするぢやなんよへ。アこりや新しい三方土器、誰が持つて来ましたぞ」

「ヤそれは八重さんの」

扶持が碌な扶持かい。鉄丸を食すといへども心汚れたる人の物を受けずとは八幡大菩薩の御託宣。心汚れた時平が扶持ありがたう思ふはな、人でないの猫畜生」

「ヤア畜生とは、舌長な梅王。今一言言つて見い」

「ム望みなら易い事。畜生々々、どう畜生」

「もう赦されぬ」

と松王丸刀の柄に手を掛くれば

梅王も反り打ち返し、詰め寄り

詰め寄る二人の女房

「これはマアおとましい、気が違ふたか松王殿」と千代が夫を抱き留むれば

「七十の賀を祝ひに来て、親父様に逢ひもせず、反り打つてどうさしやる。祝ひ日に抜いてよい

か、こちの人梅王殿」

と刀の柄にしがみつくと女房春を

取つて突き退け

「七十の賀でも祝ひ日でも堪え袋の破れかぶれ、留め立てして怪我するな。コリヤ松王、遅れたな。女房が留めるを幸ひに、頬げたに似ぬ腕なしめ」

「オ、留めらるゝを幸ひとは、わが心に引き比べて松王には慮外の雑言。身が女房が留めたよりそちが女房が親にもまだとの一言、肝先へきつと当り、堪えく堪えたがもうたまらぬ。真劍の勝負は親人に逢ふての後、それまでの腹癒せに砂かぶらさねば堪忍ならぬ。千代にこれを預ける」

と両腰抜いて放り出し、裾引からげ身拵え

「オ、畜生めがコリヤよい了簡。桜丸が来るまでは松王が命松王に預ける」

と同じく両腰放り捨て

「刃物を渡せば血はあやさぬ。女房ども邪魔するな」

とつゝと寄つて縁より下へ踏み落とせば

早速の松王落ち様に諸足かけば

残る木の上はぼつきりぐわつさりと、折れたに

驚く相嫁同士

二人が勝負も破れ相撲、共に呆れて手を打ち払ひ、うろつく中へ

早や下向

「アレ親父様のお帰りぢや、白太夫様の」

と言ふ声に

二人は肩入れ裾下ろし、腰刀差す間も

桜丸切腹の段

あらず戻られし

年は寄つても怖い親、上へも上らず犬蹲ひ

「今日の御祝儀、お目出たい」

と祝儀は述べても赤面し、塵をひねらぬばかりなり

親はほやく機嫌顔

「噂達が先へ来て七十の賀を祝ふてくれたで今日の祝ひはさらりと仕舞ふた。知れてある刻限、遅

梅王丸真逆様に落ち重なり

掴み合ひ叩き合ひ、組んでは離れ離れてはまた組み合ひ、捻ぢ付け引伏せ蹴つ踏んづ、双方力も同一年、血気盛りの根比べ

千代と春とは二人の両腰取られもせふかと氣遣ひ半分傍へも寄られず、『ハアくくく』と心をあせり氣を揉み上げ

「どちらが勝ちも負けもせず叩き合ふたが二人の存分。梅王殿、もふよいわいな」

「松王殿、もう置かしやんせ。やめてく」

と言ふをも

聞かず

「勝負つかでは無駄働き、投げてくれん」

と松王丸、嵩にかゝつて押す力

怯まぬ梅王突掛くる

肩先捻つてがつくりさせ横に抱へる松の木腕、劣らぬ肘骨梅の木腕、絡みもぢつて押し合ふ力双方一度

にこけかゝり、凭るゝ拍子に桜の立木、土際四五寸

いはなんぞ障りがあつて来ぬに極めた。梅王、松王、ようこそく来てくれたな。コレ二嫁女、煮くちたであらうが雑煮祝ひはしたもつたか」

と折れた桜は見ながらも、『誰が仕業ぞ』と咎めもせず、叱るところを叱らぬ親、一物ありと知られたり

梅王丸懐中より用意の一通取り出だし

「祝儀済んで候へば私の所存の願ひ、これに書き付け候ふ」

と親の前に差し出だせば

松王もまた一通

「身の上の願ひこれにあり」

と同じ所へ直せしは、言ひ合はせたる如くなり

白太夫打ち笑ひ

「心安いは親子兄弟夫婦。かう並んだ中、願ひあらば口では言はいでぎつとしたこの書き付け。さらばおらもぎつとして代官所の格で捌く」

と願ひ書き手に取り上げ、つぶく読むも口の内

でも心は畜生。島へ参つて御奉公がしたいとは、

満更恩を弁へぬ畜生氣はマ、離れた心。そんなら

何かい、御台様や若君様お変わりも遊ばされずござる所も知れた上、旅立ちの願ひぢやな」

「ア、イヤ御台様はその以来御目にも掛からず、

御座所も存ぜぬ。しかし女儀の御事なれば若君様とはまた格別。菅秀才の御事は確かに」

と言はんとせしが松王を尻目にかけて

「確かに、所は存ぜねども息災にごさある噂」

「馬鹿者、大切な菅秀才様息災なを聞いたばかり、御目にも掛からず在処も知らず、それでおのれ忠義が済むか。女儀の身と抜かしをる御台様は主ぢやないかエ、もつとも御不自由な配所のお住居、お傍へ参つての御奉公はコ、この白太夫がよい役ぢやわい。血氣盛り奉公盛り、菅丞相の

所縁とあれば根掘り葉掘り絶やさんとて鵜の目鷹の目。油断ならぬ讒者の仕業、スハといふ時身を惜しまず御用に立つ所存はなうて、御傍役を願ふ

願ひは何やら聞こえねど春と千代とは夫の心、知つてゐる筈後先を

知らねば案じる八重一人

「三人の兄弟誼ひ、親父様お頼み申し今日仲直しと言ひ合はした。千代さん、春さん、こりやなんぞい。何を言ふてもこちの人桜丸殿ござららぬ

故、心当てが皆違ふた。道で眩暈が起こつたか」

と見えぬ男を案じるやら、二人の願ひも気にかゝり小首傾け案じゐる

親父は二通読み仕舞ひ

「コリヤ梅王、そちが願ひに旅へ立つ隙くれと

は、ム、推量するに他でもあるまい。菅丞相のござる島か」

「成程々々、結構な御殿に引きかへ埴生の小屋の御住居、御用聞く人なければ梅王下つて御奉公仕らん。身の御暇」

と申しける

「ム、恩を知らねば人面獸心といふてな、顔は人

は命が惜しいか敵が怖いかい。旅立ちの願ひ叶は

ぬくエ、取り上げぬ」

と願ひ書き顔へ打ち付けて、はつたと睨む老ひの腹立ち

道理至極に梅王夫婦、誤り入つたる風情なり

「ヤイ松王、そちがこの願ひを見れば勘当を受けたいとな。ハ、ハ、神武天皇様以来珍しい願ひぢや

なアハ、ハ、不孝といはゞ例へのない奴、あんまり珍しい願ひなれば聞き届けてくれるぞ」

と親の了簡

「ハ、忝なし」

と悦ぶ松王勇み立ち

「親子兄弟の縁を切る所存も問はず赦されしは、この松王が主人へ忠義。推量あつての事なるべし」

「ハ、いかさまく、口は調法な物ぢやなハ、ハ、主人への道立てへ、臍がくねるわい。コリヤヤイ道も道によつてな、横に取つて行く道を

蟹忠義といふわいやい。甲に似せて穴を掘ると勘
当受くれば兄弟の縁も離れ、時平殿へ敵対はゞ切
つても捨てん所存よな。もつとも善悪差別なく主
へ義は立つにもせい、親の心に背くをなア、アレ
天道に背くといふわいやい。望み叶へてとらする
上は、人外め早や帰れ。隙取らば親子の別れ竹箒
喰らはすぞ」
と筋骨立てゝ怒る声

松王は思ひのまゝ

「女房、来い」

と引立て行く

千代はさすがに親兄弟、名残りも惜しき相嫁の顔を
見る目も飽かれぬ涙、袂絞つて出でゝ行く

「ハレヤレ嬉しや、面倒な奴片付けた。ヤイそこ
な馬鹿者、御台若君の御行方尋ねに往かぬか失せ
ぬか」

とこれも手強う決め付けられ

「そんなら島へは」

「サア行く所へは俺が行くわい。エイ出て行け、
行け」

を怖がるお春

「八重さん後でよい様に、お詫言を」

と言ひ捨てゝ夫婦は門へ

白太夫は唾を呑み込んで奥へ行く

兄弟夫婦に引別れ、取り残されし八重が身の仕舞ひ
もつかぬ物思ひ

門へ立ちそに待つ夫、思ひがけなき納戸口刀片手に
につこと笑ひ

「女房共、さぞ待ちつらん」

と声に

びつくり走り寄り

「ヤア何時の間に来たとも言はず、案じる女
房を思はぬ仕方。兄弟衆の事について親父様のお
腹立ち、その場へは出もせいで、なんでこなさん
は納戸の内に。エ、コレイナアコレ、訳を聞かし
て〜」

と聞きたがるこそ道理なれ

暫くあつて白太夫、はみだし鏢の小脇差三方に乗せ
しほ〜と、出づるも老ひの足弱車、舎人桜が前に
置き

「用意よくば、疾く〜」

と言ふに

女房がまたびつくり

「コリヤなんぢや親父様、桜丸殿、どふぞいな
ア。なんで死ぬのぢや腹切るのぢや、切らねばな
らぬ訳ならば未練な根性さぎやしませぬ。こなさ
んが言はれずば親父様のたゞ一言、案じる胸を休
めてたべ。お慈悲〜」

と手を合はせ、泣くより他の事ぞなき

「ヤア親人になに御苦労。これまで馴染む夫婦の
仲、所存残さず言ひ聞かさん。某が主人と申す
も畏れ多き齋世の君様。百姓の倅なれども菅丞相
の御不便を加へられ親人へは御扶持方。御愛樹の
松、梅、桜。兄弟が名に象り、松王、梅王、桜

と義を立て守る夫の詞

女房『わつ』と声を上げ

「仇なる恋路のお仲立ち、親王様の御悪名丞相様
の流され給ふその言ひ訳に切る腹ならこの八重も
生きてはゐられぬ。私は残つて孝行せいと胴欲に
もよう言はれた。それよりはまだ酷い腹切る礼を

申せとは、それがなんの礼どころ無理な事言ふ手間で一緒に死ねとコレ申し、女房の願ひ立てゝたべ。親父様の思案はないか、コレ、コレく俯いてばかりござらずとも、よい智恵出して下さりませ。夫の命生死は親父様のお詞次第、お前は悲しうござりませぬか。親の手づからこの三方、ハア、腹切刀は何事ぞ」

と恨みつ頼みつ身を投げ伏し、悶え焦がるゝあり様は物狂はしき風情なり

白太夫顔ふり上げ

「子に死ねといふ腹切刀、酷い親と思ふ言ひ訳ではなけれどな、この暁はわが身の祝ひ、何時もより早う起き門の戸明くれば桜丸、『ヤレ早う来てくれた、徒歩ならば夜通し但しは船か、マ、こちへ』と呼び入れて様子を聞けば右の次第ぢや。白太夫づれが倅にはマ驚き入つた健気者。留めても聞き入れず、今日の祝儀仕舞ふまで女房が来ても逢はしはせぬ、俺が出いと言ふまでは納戸の内

「泣くない」

「アイ・・・アイ」

「エ、泣きやんなやいの」

「あれ聞いたか女房ども。桜丸が命惜しまれて老人の心遣ひ、御恩も送らず先立つ不孝御赦されて下されい。下郎ながら恥を知り義のために相果つる」

と三方取つて戴くにぞ

「もうコレ今が別れか」

と泣くも泣かれぬ夫の覚悟

白太夫目をしばたゝき

「潔い倅が切腹、介錯は親がする。その刀コレ見やれ」

と懐から取り出すは、願ひ込んだる鉦撞木

「コレこの刀で介錯すれば未来永劫迷はぬ功力、利劍即是弥陀号」

と撞木を取つて打ち鳴らす、鉦もしどろに

「なまいだ、なまいだ。なまいだ、なまいだ、な

に隠れてゐいと一寸延ばしに命を庇ひ、助けてよいか悪いかはおらが了簡に及ばず。神明の加護に任さんと祝儀にくれた扇二本、幸ひ絵には梅松桜、子供の行末祈る顔で氏神の祠へ直し置き、信を取つて神籤の立願、桜丸が命乞ひ。中の絵は上から見えぬ三本のこの扇。『初手に桜を取らしてたべ、上らせ給へ』と再拝祈念。取り上げた扇開けば梅の花、南無三これは叶はぬ告げか。神の心を疑ふ神籤の取り直しはせぬものなれども、助けたいが一杯で取り直す次の扇、今度もく違ふてまた松の絵。頼みも力も落ち果てゝ下向すりや折れた桜。定業と諦めて腹切刀渡す親、思ひ切つておりや泣かぬ、そなたも泣きやんな、ヤア」

「アイ」

「泣くない」

「ア、ア、アイ」

「泣きやんな」

「アイ」

まいだ。なまいだ、なまいだ、なまいだ」

念仏の声と諸共に、襟押し拵げ九寸五分、弓手の脇へ突き立つれば

八重が泣く声

打つ鉦も、拍子乱れて

「なまいだ、なまいだ、なまいだくくく」

右の肋へ引き廻し

「憚りながら御介錯」

「オ、介錯」

と後へ廻り、撞木振り上げ

「南無阿弥陀仏」

と打つやこの世の別れの念仏

九寸五分取り直し喉のくさりをはね切つて、かつぱ

と伏して息絶えたり

八重が覚悟もこの場を去らず夫の血刀取り上ぐる

枳殻の蔭より梅王夫婦、走り寄つて

「コリヤ何事」

と九寸五分もぎ取り捨て、親の前に畏り

「先程帰れとありし時、表へは出でたれど、桜丸が来ぬ不思議と、丞相様の御秘蔵ありしアレあの桜の折れたを詮議もなされぬ。かれこれ不審に存ずるから裏より忍び立ち戻り始終の様子は承つた。チエ、是非に及ばぬあの樹と共に枯れし命の桜丸。兄弟の最期余所に見て親人の鉦鼓に合はせ

と悔む夫婦も

八重も死なれぬ身の繰り言

是非も涙に

「南無阿弥陀仏」

と鉦打ち納め

撞木と代はる杖と笠、白太夫は片時も早く菅丞相の御跡慕ひ島へ赴く現世の旅立ち、桜丸が魂魄は未来へ旅立ち

「この亡骸梅王夫婦頼むぞ」

と八重が事までつどくに頼む詞の置土産、冥途の

四段目

天拝山の段

君を思へばヨヤヨホイホ、結ばれ糸のハリナ、解けぬ心がつるござる、イヨつるござる、辛き筑紫に立つ年月

御痛はしや菅丞相、讒者の業に罪せられ、埴生の小屋の起き伏しも昨日と暮れて今日は早や

延喜三年如月半ば空も春めく野山の眺め、野飼に召させ奉りわが楽しみは在郷唄

「君を思へばヨヤヨホイホ、ハ、ハ、ハ。ハア何をがなお気晴らし。しはらくさいどつてう声、牛殿の手前も面目ない。エ、見れば見る程見事な毛並

み、角の構へ眼の備へ頭持ちの様子骨組肉合ひ、惣毛一色真黒黒牛、渡り縺子も及ばぬ色艶、天角地眼一黒直頭耳小歯違ふ、天晴れ御牛候よ。ちよちよらのちよせい」

土産はたゞ念仏

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

南無あみだ笠打ちかぶり、西へ行く足十萬億土、亡骸送る親送る生きての忠義死したる義臣、一樹は枯れし無常の桜

残る二樹は松王、梅王、三つ子の親が住み所、末世にそれと白太夫、佐太の社の旧跡も神の恵みと知られる

と誉めにける

菅丞相は珍らかに、聞き馴れ給はぬ賞め詞

「ヤイ白太夫、春は耕し秋は刈穂の稲を負せ、耕作の助けとなる牛の善悪よく知る筈。天角地眼と申せしは角と眼の備への事、一石六斗二升とは牛を買ひ取るその価、升目に積る物やらん。語れ、聞かん」

と仰せける

「さつてもしたり、天下にありとあらゆる事ども、余さず洩らさず知つてござる丞相様。牛の事はご存知なくお尋ねに預るは百姓に生れたこれも一得。お慮外ながら、へ、牛の講釈マ、聞かしやりませ。エ、一黒と申すは俵物の石目ではござりませぬ。毛色を吟味する時は黒いが極上、それで一黒。次に直頭とは頭の見どころ。頭とはかしら、どつちへも傾かずまんろくながよいさかいで直頭と申します。耳小の耳は耳、小は小さし、随分耳は小さいを好みます。さて歯違ふとはきやつ

がおねく／＼にそれを噛む。上下の歯先揃ふは悪し、五一ぐいちに生へたが歯違ふの齒の見どころ。次第を上から言ひ立つれば一石六斗二升八合。牛の講釈、モーウ仕舞ひでござんまする」

「誠に性は道によつて賢し。白太夫が咄を聞き、一つの得を得たるは」

と仰せに

ひよこく／＼小踊りして

「こりやマアあんたる仰せぞい。親の代から御領分の百姓、三つ子の事までお世話になされ、御恩に御恩ありがたうて寝た間も忘れぬこの親と違ふて、三人の倅ども、一人は死ぬる、後二人は氣も揃はず面倒な奴ら打ち放つてこの太宰府へ参つたはエ、去年の三月。うそ淋しい不自由なお住居、一年の日数は立てど月見花見にもなされず、今日は何と思し召し『牛引け』とある御意が出て、私が皺も腰もア、延びやかな春の野面。安楽寺へ御参詣は御帰洛の御立願りゅうがんでござりませう」

「住侶じゅうりよの歩行はいづくへぞ。我は貴院へ行く折からはにて対面祝着々々」

「ハ、ア愚僧儀も他ならず、公の御目に掛かりたく参る子細余の儀にあらず。夜前やぜん不思議の靈夢の告、『御慈愛の梅一樹、配所の主に見せよ』とある示現に変わぬ観音堂の左の方、一夜に生ひ出づる不思議さよ」

と語るも

聞くも正夢の、割符を合はせし如くなり

「これより寺へは程近し」

と住侶伴ひ御歩路、安楽寺に入り給へば、『それぞ』としるき梅花の薫、袖に留木とめぎの心地せり

「暫くこれにて御詠め」

と床几直させ褥しよせを設け、御菓子小竹筒こささと住持のもてなし

自太夫はこつてこて、梅の土際覗き廻り

「ヤこりや不思議、こりや希代きたいぢや。申し丞相様、道すがら御住持の夢咄、へ、何をやらるゝや

「いやとよ、我に科なければ仏に苦勞かけ奉り身の上祈る心はなし。讒者の業としろし召さば、罪なき事も世に顕はれ、帰洛の勅たく旋下るべし。それまでは菅丞相、月にも花にも目は触れず、私なき臣が心帝はしろし召されずとも、天の照覧明らかなり。安楽寺へ志すはこの暁、不思議の靈夢れいむ。菅丞相が愛樹の梅、今如月の花盛り、都の住居思ひ寝の枕の硯引き寄せて、筆に任せて書くばかり。『東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、主まなして春な忘れそ』と心を延べて睡まどろみに、妙なる天童わが枕に立たせ給ひ、『汝憐憫の心深く仁義を守る忠臣の功いこう、心なき草木そうもくまで情を受けし主を慕ひ花物言はねどその証、安楽寺へ詣で見よ』と示現によつて」

と宣ふところへ

安楽寺の住僧杖を便りに老の足、『それぞ』と見奉りしより、小腰をかゞめ立ち寄れば

丞相鞍くまより下りさせ給ひ

ら、そんな事がようあらふと誠しない事疑ふておりました、が来て見てびつくり。この木の技ぶり花の匂ひ、佐太のお下屋敷に預つておりました、オ、それぢやく／＼その梅でござりまする。ア、神の告は争はれぬ。おらがこゝへ来た後では水一杯呑まし人もあるまいに、ぶき／＼とした木の色艶、目立めだちのずあいがつういつひ。花はうざる程付いたれば梅漬うめづけの時分二三斗は確かにならう。四五升は地を借つた年貢代、御寺へも進ぜます、後はこつちの実入り／＼。今はまず腹の実入り。御馳走酒下さりますよ。ア、コ、これお酌、白太夫が盃はいつでもこの天目、立ち酒は氣にかゝる」

と床几の傍にちよつ蹲つひひ、口も心もありのまゝ見へた通りの律義者

花の詠めに一人の興を催しをはする所に

「ソリヤ喧嘩よアリヤ抜いた、切り合ふてソリヤ来るは、寺内へ入れな門打て」

と言ふ間

あらせず踏込みく、打ち合ひ戦ふ侍二人
寺僧は驚き

白太夫、御座を囲ふて

「ア、コレく見れば双方旅装束、喧嘩は振り物
とあつてからこゝで仕舞ひは付けさせぬ。出やれ
く」

と言ふをも

聞かず切り合ふ一人は我が子の梅王

「コリヤマアそちは何として、ア、ひあいな切ら
れな」

と気を揉み焦る親心

声の助太刀相手の刀梅王に打ち落され、逃ぐるをす
かさず飛びかゝり、片手掴みにもんどり打たせ、膝
に固めし健気の振舞ひ

「ヤレく出かした手柄々々、ヤレ手柄。手柄は
したが喧嘩の次第、次にはそちが下つた様子、都
の事を案じてごぞます。幸ひこれに丞相様、様子
一々申し上げい」

木、有情非情も隔てなく菅丞相を慕ひ来る梅に褒

美

の御言の葉

「『梅は飛び桜は枯るゝ世の中に、何とて松のつ
れなかるらん』。つれなかるらん松王は時平が舍
人、枯れし桜は宮の舍人、梅王はわが舍人、花の
栄へは安楽寺」

その名も高き飛び梅の、不思議は今に隠れなし

「ヤイ梅王、ありがたい今の御歌。この梅に准へ
その方をお誉め遊ばし、『桜は枯るゝ世の中』と
は死んだ倅を御悔み。『つれなかるらん』とある
松王めは、時平に追従しておるな」

「ホ、親人の推量違はず、兄弟といふも穢らはし
い。畜生めは差し置いてさす敵はこの鷲塚。サア
時平が工み白状せい、いやと言へば刀の引導どう
ぢやく」

と立ちかゝる

「ア、コレ聊爾あるな。主従の義を立て抜く命に

「ハ、ハ、ア恐れながら梅王が念願達し、変らせ
給はぬ御尊体見奉るは生涯の本望。都に御座ある
お二人様、世を忍ぶ御身なれば一つ所には置きま
されず。若君様は武部源蔵に預け置き、私が妻桜
丸が女房、八重と春とは御台様の御介抱。御身の
上は差置かれ『配所の様子見て参れ』と仰せに幸
ひ出船の手番ひ、天運に叶ひ日和まん、千里一は
ね日数もこめず、夜前この地へ筑紫船乗合ひの中
に時平が家来鷲塚平馬。この梅王を見知らぬ馬鹿
者、ふづくりかけて様子を問へば、『菅丞相を殺
しに来た』と汝が口から最期を急ぐ。寺にごぞる
をよう知つて直ぐに仕掛ける不敵者、梅王が御土
産」

と早縄掛けてぐつと締め上げ、縁柱に猿繫ぎ心地よ
くこそ見へにける

丞相御悦喜浅からず

「恋しき都の様子を知らず、忠義の花は有情の梅
王。示現によつて飛び来たる花は非情のこの梅の

替へて言はぬは古風、言はして置いて殺すも古

風、新らしう助かる様に残らず申す。時平殿は王
位の望み、邪魔になる菅丞相首取つて立ち帰れ、
軍陣の血祭して大望の旗を挙げ、天皇親王院の御
所、片端仕舞ふて天下を一呑み。身共も公家にな
る楽しみ、空悦びの裏が来て恥を曝す縛り縄、コ
レ早ふ解いて下さりませ」

と時平が叛逆

一々残らず聞こし召されし菅丞相、柔和の形相忽ち
変はり、御眼尻に血を注ぎ眉毛逆立ち御憤り、都の
方を睨み付け物狂はしく立ち給へり
白太夫びつくりし

「知れてある時平が工み、今聞いたか何ぞの様に
ついぞ覚へぬ怖いお顔。こゝから睨ましまして
も都へは届きませぬ。御持病の瘡が発ればチエ、
悲しうござります」

と老のくどく物案じ

「やおれ梅王、白太夫。時平の大臣が謀叛の企て

聞き捨てられぬ御大事、赦免なければ帰洛も叶はず、王位を望む朝敵としろし召されぬ玉体危し。臣が忠義徒らに此所に朽ち果つる骸は虚名蒙るも、死したる後は憚りなし。靈魂帝都に立ち帰り帝を守護し奉らん、天に誓ひの我が願ひ、驗は目の前」

白梅の楚ぼつきと折り取り給ひ

「朝敵一味の倭人ばら、退治の手始めこれ見よ」

と枝にて丁ど打ち給へば

平馬が首は飛梅の楚も花の乱れ焼き、誠の剣も及びなき梅の名作御手の内、親子は恐るゝばかりなり

「ヤア汝ら、かゝる大事を聞くからは片時も早く都に上り、時平が工み奏聞せよ。我は見上るこの高山絶頂に三日三夜立行根気を碎き、梵天帝釈閻羅王、三天王に誓ひを立て、魂魄雲井に鳴る雷。十六万人千の首領となつて眷属引き連れ都に上り、謀叛の奴ばら引き裂き捨てん。現世の対面これまでなり、いそふれやつ」

と御声も共に烈しき疾風、吹き立てく本堂の薨破れて庫裏方丈、薮遣戸は木の葉の如く、庭の立木も飛梅も花も砂も吹きしきる
親子も住持も大きに驚き

「期も来たらざる御身を捨て、天帝へ祈誓あり、御本意は達するとも、御台、姫君、若君の御嘆きはいかばかり。留まり給へ」

と御袖に、取り付く梅王

白太夫、弓手馬手へ刎ね飛ばし

「住僧いたくな留め給ひそ、早や天帝の恵みによつて形はこのまゝ鳴神の不思議を見せん」

と散り残る梅花を取つて口に含み、天に向かつて白梅花渦巻く花弁火焰となつて、雲井遙かに行末は、怪し恐ろし

北嵯峨の段

夢破る

りばな、貝に驚きなされたか惣身に冷汗。思へば憎い山伏づら」

「サアわしも腹が立つて入れる手の内もやらなんだ」

と二人が話に

御台所

「イヤノウ山伏の業ではない、恐ろしい夢を見て動悸が今に納まらぬ。その夢の物語、春も八重も聞いてたも。所は宰府安楽寺、連合ひの御秘蔵が筑紫へ飛び梅。梅王丸も一時に下り合はせた御悦び。『梅は飛び桜は枯るゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん』と即座の御詠歌。一字も忘れず覚えしは物の知らせの正夢か。まだその上に時平の家来、丞相様を殺す工み。事頭はれて都の様子、王位を奪ふ敵の企て白状するをお聞きなされ、以ての外なお腹立ち。『赦免なければ帰洛も叶はず。危いは天皇の御身の上、帝釈天へ祈誓を掛け鳴る雷の神となつて、時平に組せし同類共

門山伏が法螺の貝、吹き立てく北嵯峨の在も山家も抜け目なく、役の行者の跡を追ひ、朝夕してやる五器膳器五器の実修行と知られたり

「ア、やかましい。御奉礼殿、貝吹いて下さんな。頼んだ方のお気結ばれ、夜はろくに御寝ならず今とろくとお睡眠。アレまだいの、断り言ふても聞き入れぬ、無法礼殿止めやらぬか。そしてから不慮慮な、笠も脱がずに内へ這入りうそくく何見やる。女子ばかりと思やつたら当の槌が違ひましょ。サア出やらぬか、エ、去にやらぬか」

と呵り転され御奉礼、門へは出づれど目は跡に心残して立ち帰る

「エ、どんな奴が失せおつて御機嫌はいかゞぞ」と障子のこなたに手をつかへ

「思ひがけない法螺の貝、御目も覚めふ。お痞は上らぬか。八重さんいかに」

と尋ねれば

「サレバイナ。いつにない御台様すやくくと寝入

蹴殺し捨てん』と御憤り、そのすさまじさ恐ろしさ、夢とは更に思はれず」

と語り給へば

二人の女房

「お案じなさるは御尤も。さりながら逆夢さかゆめと申しますればかへつてめでたい御吉きつ吉きつ左右さう。ノウ春様、そふでないか」

「成程そふぢや、追付け御帰洛なされませう。したが今来た山伏やまぶきづら、編笠で顔も見せず物も言はず、うそく覗いて去におつたがいかにしても気にかゝる。夫梅王殿の指図にてこの嵯峨に人知れず御台様のござりますを、嗅ぎ出しに来た敵の犬。白太夫様梅王殿も筑紫へ下つて我々ばかり、もふこゝにも置かれませぬ。幸ひこの頃承はれば、法性坊の阿闍梨様下嵯峨へ来てぢやげな。丞相様とは師弟の約束、右の様子を申し上げ御台様の御事をお願ひ申して、今日中に早ふ所が替へましたい。わしや一走り往て来やんしよ。八重さ

と振り廻す

「ヤア小賢しい女め。時平公の仰せを受け御台を迎ひに来たつたり。邪魔ひるがば討ち取れ」

と下知に従ひ茅花ぼばなの穂先、切り立てく
追ひまくれど

多勢に無勢数ヶ所の疵、長刀杖に立ち帰り、

「ノウ御台様、もふ叶はぬ、早ふ退いて下さりませ。春さんはまだ帰らずか、チエ、口惜しいく

無念々々」

と言ひ死に、はかなき八重が最期の有様

御台は前後も弁へず

「コレ八重、気を慥たかに持つてたも。西も東も敵の中、そなたに別れ自らはなんとならうぞ悲し
や」

と死骸に取り付き御嘆き

星坂すかさず走り寄り、引立て行かんとせし所に
以前の山伏のつさくと頭はれ出で

「イデその御台を齋料とまりょう」

ん、よろづに心を付け油断して下さんすな」

「オ、春さんのよふ気がついた。大儀ながら往て下さんせ、後は氣遣ひさしやんすな」

と男勝りの甲斐々々しさ

御台も殊なう御悦び

「コレ春、僧正様に逢やつたら夢の事もお話し申し、善悪よめいの訊聞いてたも」

「アイく何もかも心得ております。兎角はゆるりとしてみられぬ」

と抱へするやら笠取るやら

「追付け吉左右お知らせ」

とほうくしてこそ急ぎ行く

程もあらず時平が家来星坂源吾

「あれこそ丞相の御台よ」

と手の者連れて駆け入るを

手早く八重は長押ながおしの長刀ながなた

御台を奥へと目で知らせ

「何者なれば踏込んで狼藉、目に物見せん」

と飛びかゝつて源吾が首筋掴んで目より高く指し上げ

「冥途の旅へ失せおれ」

と泥田の中へ頭転倒、直ぐに御台を引抱かへ石原砂道嫌ひなく、飛ぶが如くに

寺入りてらいりの段

一字千金二千金、三千世界の宝ぞと教へる人に習ふ子の中に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者労はり傳かたき我が子ぞと、人目に見せて片山かたやま家芹がせりよう生の里へ所がへ

子供集めて読み書きの器用不器用清書きを、顔に書く子と手に書くと人形書く子は頭かく、教へる人は取り分けて世話をかくとぞ見へにける

中に年がさ五作が息子

「コレ皆これ見や。お師匠さんの留守の間に手習ひするは大きな損。おりや坊主頭の清書きした」

と見せるは十五のよだれくり
若君はおとなしく

「一日に一字学べば三百六十字との教へ。そんな
事書かずとも本の清書きしたがよい」

と八つになる子に呵られて

「エ、ませよく」
と指差して詵戯かゝるを

残りの子供

「兄弟子に口過ごすよだれくりめを歪めてやる」

と手ん手に卦算振り廻す、自然天然肩持つも伝はる
筆の威徳かや

主の女房奥より立ち出で

「またこりや例の諍ひか、おとましやく。今日
に限つて連合ひの源藏殿、振舞ひに往てなれば戻
りも知れぬ。ほんにくゝなた衆で一時の間も待
ち兼ねる。今日は取り分け寺入りもある筈。昼か
らは休ます程に皆精出して習ふたく」

「ソリヤまた嬉しや休みぢや」

すげなが、どのお子でござりますぞ」

「アイ、これが源藏殿の跡取りでござります」

「これはくゝよいお子様や。ほかにも大勢の子
達、いかにお世話でござりませよ」

「アイ、御推量なされて下さりませ。シテ寺入り
はこのお子でござりますか、名は何と申します」

「アイ、小太郎と申しまして腕白者でござりま
す」

「イヤ、イヤ氣高いよいお子や。折悪ふ今日は連
合ひ源藏も振舞ひに参られました」

「これはマアお留守かいな」

「お待ち遠なら私が呼びに参りませよ」

「ア、イエゝゝ幸ひ私も参つて来る所があれば、
その内うにはお帰りでござりませふ。これ三助、
その持つて来た物あなたの傍へ上げませ」

『アツ』と答へて堺重、櫃に乗せたる一包み、内儀
の傍へ差し出だす

「これはマアゝ言はれぬ事を」

と筆より先に読み声高く

「いろはに」

「この中は御人下され」

「一筆啓上、候べく」

の男が肩に堺重、文庫机を担はせて

利発らしき女房の七つばかりな子を連れて

「頼みませふ」

と言ひ入るゝ

内にもそれとはや悟り

「こちへお這入り遊ばせ」

と言ふもしとやか

「アイ、アイ」

と愛に愛持つ女子同士、来た女房はなほ笑顔

「私事は、この村はづれに軽ふ暮してをる者でこ
ざります。この腕白者をお世話なされて下さり
よかとお尋ね申しにおこしましたれば、『おこ
せ、世話してやる』とモ結構なお詞に甘へ、早速
連れて参りました。内方にも御子息様がござりま

「イヤ、おはもじながらこの子が参つた印。この
堺重は子達への土産、取り弘めて下さりませ」

と言はねど知れし蒸物煮しめ、わが子に世話を焼き
豆腐、粒椎茸の入れたるは奔走子とこそ見へにけれ

「これはマア、何から何まで取り揃へて御念の入
つたこと、戻られたら見せませふ」

「イヤモほんの心ばかり、よろしうお頼み申し上
げます。コレ小太郎、ちよつと隣村まで往て来る
程におとなしうして待つてゐや。悪あがきせまい
ぞ。御内証様、往て参りませよ」

と表へ出づれば

「かゝ様、わしも行きたい」

と縫り付くを

振り放し

「嗜めよ。大きな形して後追ふのか。御覧しま
せ、まだ頑是がござりませぬ」

「オ、ソリヤ道理いな。ドリヤ小母がよい物やり
ましよ、つゝ戻つてやらんせ」

と目で知らずれば

「アイくついちよつと一走り」

と後追ふ子にも引かざるゝ、振り返り見返りて、下部

寺子屋の段

引き連れ急ぎ行く

「どりやこちの子と近付きに」

と若君の傍へ寄せ、機嫌紛らす折からに

立ち帰る主の源蔵、常に変りて色蒼ざめ内入り悪く子供を見廻し

「エ、氏より育ちといふに繁華の地と違ひいづれを見て山家育ち。世話甲斐もなき、役に立たず」

と思ひありげに見へければ

心ならず女房立ち寄り

「いつにない顔色も悪し。振舞ひの酒機嫌かは知

「よいともく上々吉。シテその連れて来たお袋はいづくに」

「サア、お前の留守ならその間に隣村まで往て来と言ふて」

「ムそれもよしく、大極上。まづ子供と奥へやり、機嫌よう遊ばし召され」

と若君諸共誘はせ、後先見廻し夫に向ひ

「最前の顔色は常ならぬ気相、合点の行かぬと思ふたところに今またあの子を見て打つて変へての機嫌顔。なほもつて合点行かず、どふやら様子がありそふな。気遣ひな聞かして」

と問へば

源蔵

「ホ、ウ気遣ひな筈。今日村の饗応と偽り某を庄屋の方へ呼びつけ、時平が家来春藤玄蕃、今一人は菅丞相の御恩を着ながら時平に従ふ松王丸。ヤこいつ、病み毫けながら検分の役と見へ数百人

らぬが、山家育ちは知れてある子供、憎体口は聞へも悪い。殊に今日は約束の子が寺入り、母御が連れて見へました。悪い人と思ふも気の毒、機嫌直して逢ふてやつて下され」

と小太郎連れて引き合はせど

さし俯いて思案の体

いたいけに手をつかへ

「お師匠様、今から頼み上げます」

と言ふに

思はずふりあをのき、きつと見るより暫くは打ち守りゐたりしが

忽ち面色やはらぎ

「テさて器量勝れて気高い生れつき。公家高家の御息といふても恐らく恥しからず。テさてそなたはマ、よい子ぢやなう」

と機嫌直れば

女房も

「なんとよい子、よい弟子でござんしよがな」

にて追取巻き、『汝が方に菅丞相の一子菅秀才わが子として匿ふ由、訴人あつて明白。急ぎ首討つて出だすや否や、たゞし踏込み受取らふや返答いかにと』と退引きならぬ手詰。是非に及ばず、首討つて渡さふと請け合ふたサ心は、数多ある寺子の内いづれなりとも身代りと思ふて帰る道すがら、あれかこれかと指折つても、玉簾の内の御誕生と薦垂の中で育つたとは似ても似付かず。ハ、所詮御運の末なるか痛はしや浅ましやと、屠所の歩みで帰りしが、天道のひかへ強きにや。あの寺入りの子を見れば、満更鳥を驚ともいはれぬ器量。一旦身代りで欺きこの場さへ遁れたらばすぐ河内へお供する思案。今暫くが大事の場所」

と語れば

女房

「待たんせや。その松王といふ奴は三つ子のうちの悪者。若君の顔はよふ見知つてゐるぞへ」

「サそこが一かばちか。生き顔と死に顔は相好の

変はるもの。面差し似たる小太郎が首、よもや贖とは思ふまじ。よしまたそれと頭はれたらば松王めを真二つ、残る奴輩切つて捨て叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供と胸を据ゑたが一つの難儀。今にも小太郎が母親、迎ひに来たらば何とせん。この儀に当惑さし当つたはこの難儀」

「イヤその事は氣遣ひあるな。女子同士の口先でちよつぽくさ欺して見よ」

「イヤその手では行くまい。大事は小事より頭はるゝ、ことによつたら母諸共」

「ヒエ」

「コリヤ若君には替へられぬ、お主のためを弁へよ」

と言ふに

胸据ゑ

「そふでござんす、氣弱ふては仕損ぜん」

「鬼になつて」

と夫婦は突立ち、互ひに顔を見合はせて

「弟子子といへばわが子も同然」

「サア、今日に限つて寺入りしたはあの子が業か母御の因果か」

「報ひはこちが火の車」

「追付け廻つて来ませふ」

と妻が嘆けば

夫も目をすり

「せまじきものは宮仕へ」

と共に涙にくれぬたる

かゝるところへ春藤玄蕃

首見る役は松王丸

病苦を助くる駕籠乗物門口に昇き据ゆれば

後には大勢村の者付き従ふて

「ハイ」

「ハイ」

「ハイ」

「ハイ」

「ハイくくく」

「申し上げます。皆これにをる者の子供が手習ひに参つてをります。もし取り違へ首討たれてはモ取り返しがなりません」

「ハイくくくくくくくくどふぞお戻し下され」

と願へば

玄蕃

「ヤアかましいい蠅虫めら。うぬらが餓鬼の事まで身どもが知つたことかい。勝手次第に連れ失せふ」

と叱り付くれば

松王丸

『ヤレお待ちなされ暫く』

と駕籠より出づるも刀を杖

「憚りながら彼等とても油断はならぬ。病中ながら拙者が検分の役勤むるもほかに菅秀才の顔見知りし者なき故。今日の役目仕終すれば病身の願ひ御暇下さるべしとありがたき御意の趣き、おろ

そかには致されず。菅丞相の所縁の者この村に置

くからは、百姓共もぐるになつて銘々が倅に仕立て助けて帰るサ手もあること。コリヤヤイ百姓めら、ざはくと抜かさずとも一人づゝ呼出だせ。

面改めて戻してくりよ」

と退引きさせぬ釘鍔、打てば響けの

内には夫婦

兼ねて覚悟も今更に胸轟かすばかりなり

表はそれとも白髪親仁、門口より声高に

「長松よくく」

と呼び出せば

「オツ」

と答へて出てくるは腕白顔に墨べつたり、似ても似

つかぬ雪と墨

「これではない」

と赦しやる

「岩松はあぬか」

と呼ぶ声に

「爺さん何ぢや」
とはしごくで、出て来る子供の頑是なき、顔は丸顔
木みしり茄子

「詮議に及ばぬ連れ失せう」
と睨みつけられ

「オ、恐や。嫁にも喰はさぬこの孫を命の花落ち
遁れし」と祖父が抱へて走り行く

次は十五のよだれくり

「ほんよ〜」

と親仁が手招き

「とよ、おりやもこゝから抱かれて去の」

と甘へる顔は馬顔で声きりぎりす

「オ、泣くな。抱いてやらふ」

と干鯉を猫なで親が喰はへ行く

「私が倅は器量よし、お見違へ下さるな」

と断り言ふて呼び出だすは

色白々と瓜実顔

「ヤ、こいつ胡乱」

と引つとらへ見れば首筋まつ黒々、墨かあざかは知
らねども

「こいつでない」

と突き放す

その他山家奥在所の子供残らず呼び出して、見せて
も見せても似ぬこそ道理、土が産ました量り芋、子
ばかりよつて立ち帰る

『スハ身の上』と源蔵も

妻の戸浪も胸を据ゑ、待つ間ほどなく

入り来る兩人

「ヤア源蔵、この玄蕃が目の前で討つて渡そと請
け合ふた菅秀才が首、サ受取らふ。早く渡せ」

と手詰の催促ちつとも臆せず

「仮初ならぬ右大臣の若君、搔き首捻ぢ首にも致

されず。暫くは御用捨」

と立ち上るを

松王丸

「ヤアその手は喰はぬ。暫しの用捨と隙取らせ逃

ぞ」

と見咎められて戸浪は『ハツ』と

「イヤこりや今日初めて寺、イヤアノ寺参りした

子がござんす」

「ナニ馬鹿な」

「オ、それ〜、これがすなはち菅秀才のお机文

庫」

と木地を隠した塗机、ざつと捌ひて言ひ抜ける

「何にもせよ隙取らすが油断の元」

と玄蕃諸共突立ち上る

こなたは手詰命の瀬戸際

奥にはばつたり首討つ音

『ハツ』と女房胸を抱き

踏込む足もけしとむ内

武部源蔵白台に首桶載せてしづく出で、目通りに

さし置き

「是非に及ばず。菅秀才の御首討ち奉る。いはゞ
大切な御首、性根を据ゑてサ松王丸、しつかり

げ仕度致いてもな、裏道へは数百人を付け置く、
蟻の這ひ出づる所もない。ガまた、生き顔と死に
顔は相好が変はるなどと、身代はりの鷹首それも
たべぬ。古手な事して後悔すな」

と言はれてぐつとせき上げ

「ヤア要らざる馬鹿念、病み呆けた汝が眼玉がで
んぐり返り逆様眼で見様はしらず。紛れもなき菅

秀才の首、追付け見せう」

「ム、その舌の根の乾かぬ内に早く討て」

「疾く切れ」

と玄蕃が権柄

「ハツ」

とばかりに源蔵は、胸を据ゑてぞ入りにける

傍に聞きある女房は『こゝぞ大事』と心も空

検使は四方八方に眼を配る

中にも松王、机文庫の数を見廻し

「ヤア合点のゆかぬ。先達て去んだ餓鬼らは以上

八人。机の数が一脚多い、その倅はどこにをる

と検分せよ」

と忍びの鏢元くつろげて、『虚と言はゞ切り付けん、実と言はゞ助けん』と堅唾を呑んで控へゐる

「ムハハハハ、なんのこれしきに性根所か

ハハハハハ。今浄玻璃の鏡にかけ鉄札か金札か地獄極楽の境。家来衆、源蔵夫婦を取り巻き召され」

『畏まった』と捕手の人数十手振つて立ちかゝる

女房戸浪も身を堅め

夫はもとより一生懸命

「サア実検せよ検分」

と言ふ一言も命がけ

後は捕手向うは曲者

玄蕃は始終眼を配り

『いざぞ絶体絶命』と思ふ内

はや首桶引き寄せ、蓋引明けた首は小太郎

『賈と言ふたら一討ち』と早や抜きかける

戸浪は祈願、『天道様、仏神様、憐み給へ』と女の

念力

眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て

「ム、コリヤ菅秀才の首討つたは紛ひなし、相違なし」

と言ふに

びつくり源蔵夫婦、あたりきよろしく見合はせり

検使の玄蕃は検分の、詞証拠に

「出かしたくよく討つた。褒美には匿ふた科赦してくれる。イザ松王丸、片時も早く時平公へお目にかけん」

「いか様、隙どつてはお咎めも如何。拙者はこれよりお暇給はり病氣保養致したし」

「オ、サ役目は済んだ、勝手にせよ」

と首受け取り、玄蕃は館へ

松王は駕籠にゆられて立ち帰る

夫婦は門の戸びつしやり閉め、物をも得言はず青息吐息五色の息を一時に『ホツ』と吹き出すばかりなり

胸なでおろし源蔵は天を押し地を押し

「ハア、ありがたや忝なや。凡人ならぬわが君の

御聖徳が頭はれて松王めが眼がかすみ若君と見定

めて帰つたは、天成不思議のなすところ、御寿命

は万々年、悦べ女房」

「イヤもふくくく大抵の事ぢやござんせぬ。あ

の松王めが目の玉へ菅丞相様が這入つてござつた

か、たゞし首が黄金仏ではなかつたか。似たとい

ふても瓦と黄金、宝の華の御運開きとあんまり嬉

しうて涙がこぼれる。アハ、ありがたや尊や」

と悦び勇む折からに

小太郎が母いきせきと迎ひと見へて門の戸叩き

「寺入りの子の母でござんす。今漸々帰りまし

た」

と言ふ声

聞くよりまたびつくり

「一つ遁れてまた一つ、こりやマア何とどぶせふ」

と妻が騒げど

夫は胴据ゑ

「コリヤ最前言ふたはこゝの事、若君にはかへられぬ。エ、狼狽者め」

と戸浪を引き退け、門の戸ぐはらりと引き開くれば

女は会釈し

「これはマア御師匠様でござりますか。悪さをお頼み申します。どこにあやるぞお邪魔であるに」

と言ふを

幸ひ

「ア、イヤ奥に子供と遊んでゐます。連れ立つて

帰られよ」

と真顔で言へば

「ム、そんなら連れて帰りましょ」

とずつと通るを

後よりたゞ一討と切り付くる

女もしれ者引外し逃げて

逃がさぬ源蔵が、刃鋭どに切り付くるを

わが子の文庫ではつしと受け止め

「コレ待った、待たんせコリヤどぶぢや」と勿ねる刃も

用捨なくまた切り付くる文庫は二つ

中よりばらりと経帷子、『南無阿弥陀仏』の六字の幡、頭はれ出でしは

「コハいかに」

と不思議の思ひに剣もなまり、すゝみ兼ねてぞ見へにける

小太郎が母涙ながら

「若君菅秀才のお身代り、お役に立てゝ下さったか、まだか様子が聞きたい」

と言ふに

びつくり

「シテくそれは得心か」

「サア、得心なりやこそこの経帷子六字の幡」

「ム、シテ其元は何人の御内証」

と尋ぬる内に

門口より

「梅は飛び桜は枯るゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん。女房悦べ、悴はお役に立つたぞ」

と聞くより『わつ』とせき上げて前後不覚に取り乱す

「ヤア未練者め」

と叱り付け、ずつと通るは松王丸

見るに夫婦は二度びつくり、『夢か現か夫婦か』と呆れて言葉もなかりしが

武部源藏威儀を正し

「一礼はまづ後のこと。これまで敵と思ひし松王、打つて変つた所存は如何に。いぶかしさよ」

と尋ぬれば

「ホ、御不審は尤も。存知の通り我々兄弟三人は銘々に別れて奉公。情けなやこの松王は時平公に従ひ、親兄弟とも肉縁切り御恩受けたる丞相様へ敵対。主命とはいひながら皆これこの身の因果。何とぞ主従の縁切らんと作病かまへ暇の願ひ。」

『菅秀才の首見たらば暇やらん』と今日の役目。

よもや貴殿が討ちはせまい、なれども身代りに立つべき一子なくば如何せん。こゝぞ御恩の報ずる時と女房千代と言ひ合はせ、二人が中の悴をば先へ廻してこの身代り。机の数を改めしもわが子は来たかと心の著。菅丞相にはわが性根を見込み給ひ、『何とて松のつれなからふぞ』との御歌を、『松はつれないく』と世上の口にかゝる悔しき。推量あれ源藏殿、悴がなくばいつまでも人になしと言はれんに、持つべきものは子なるぞやと言ふに

女房なほせき上げ

「草葉の陰で小太郎が聞いて嬉しう思ひませふ。持つべきものは子なるとはあの子がためによい手向け。思へば最前別れた時、いつにない後追ふたを叱つた時のくその悲しさ。冥途の旅へ寺入りと早や虫が知らせたか、隣村へ行くと言ふて道まで去んで見たれどもな、子を殺さしにおこして置

いてどふマア内へく去なるゝものぞいの。死に顔なりとも今一度見たさに、未練と笑ふて下さんすな。包みし祝儀はあの子が香典、四十九日の蒸物まで持つて寺入りさすといふ悲しい事が世にあらふか。育ちも生れも賤しくば殺す心もあるまいに、死ぬる子は媚よしと美しう生れたが、可愛やその身の不仕合せ、何の因果に庖瘡まで仕舞ふた事ぢや」

とせき上げて、かつぱと伏して泣きければ

共に悲しむ戸浪は立ち寄り

「最前に連れ合ひが身代りと思ひ付いた傍へ往て、『お師匠様今から頼み上げます』と言ふた時の事思ひ出せば、他人の私さへ骨身が砕ける。親御の身ではお道理」

と涙添ゆれば

「イヤこれ御内証、コリヤ女房も何でほへる。覚悟した御身代り、内で存分はへたでないか、御夫婦の手前もあるわい。ナニ源藏殿、申し付けては

五段目

大内天変の段

雲井のどけき大内山、早や立ち替はる水無月下旬、日毎々々に時違へず電光雷火はたたがみ、打ち続いでて天変只事ならず

玉体安全雷除けの加持あらんと法性坊の阿闍梨参内あり、紫宸殿に檀を構へ幣帛押し立て独鈷三鈷鉛錫杖振り立てく祈らるゝ、擁護もさぞと知られる寛平法皇の御使ひとして齋世親王

苧屋姫

菅秀才を伴ひ参内あり

「兼ねて法皇貴僧に談じ給ひし通り菅秀才に菅原の家相続、天機よろしく次手を以て御沙汰あつて承りしが、次には丸が虚名の逆鱗申し晴らして給はれ」

と事丁寧に述べ給へば

時平の大臣からくくと打ち笑ひ

「蠅同然の小倅なれども、生け置いては後日の

怨。首打つたると思ひしに小賢しくも我を謀り今

日まで存命せしは、松王めが計らひよな。偽首喰

らふたうつそりめ」

と春藤玄蕃が肩骨掴み

「不忠油断の見せしめ」

と首引き抜いてかしこへ投げ捨て

「ヤアくゝ兩人、この小倅は丸に任せ齋世親王苧

屋姫、引立て参れ」

と下知するにぞ

清貫

希世、『心得し』と奥を指して行く所に

俄に晴天かき曇り風雨起つて絶え間なく、電光虚空にひらめき渡り、天地も崩るゝ大雷、ぱちくくぐはらくく

二人はがちくゝ胴震ひ、色青ざめて逃げまどふ

時平の大臣はびく共せず

「愚僧元より菅丞相とは師弟の仲、靈魂の怒りを休むる菅原の家相続よろしく奏し奉らん。各々はこなたへ」

と打ち連れ奥に入り給ふ

『齋世親王菅家の姉弟密かに参内致せし』

と春藤玄蕃が報せによつて

時平の大臣大きに驚き

希世

清貫前後に従へ、一散に駆け来たり寝殿遙かに窺ひ見れば

「げにも玄蕃が申すに違はず時平が怨となる奴ばら片端打ち殺し、天皇法皇遠島させ我れ万乗の位に就かん。清貫希世抜かるな」

と八方へ眼を配り、事を窺ひ待つ

とも知らず、奥より出づる菅秀才

「ソレ」

と時平が掛け声に

左中弁つゝと寄り、小腕取つて捻ぢ伏せたり

「ヤア臆病な腰抜け共。鳴れば鳴れ落ちれば落ちよ、雷神雷火も足下にかけて踏み消してくれんずもの」

と菅秀才を小脇にかい込み、虚空を睨んで突立つた

り

猶もはためく震動雷電

希世は生きたる心地なく、御階の下に屈みある、頭の上に車輪の火の玉落ちると見へしが

左中弁、五体炎に焼けたゞれ、天罰目の前師匠の

罰、心地よかりし最期なり

これにも屈せぬ強気の時平

「ヤア三善の清貫いづくにある、丸に敵する雷神なし。怖くばこゝへ来たれよ」

と呼ぶを

力に立ち寄る清貫、あはやと三善も雷火に打たれ、即時に息は絶え果てたり

二人が最期にさしもの時平、心臆して膝わなく

檣にしたる菅秀才、逃げて行方も知らばこそ

「この上頼むは法力」

と檀上に駆け上がり、両手を覆ふてうづくまる

左右の耳より尺余の小蛇頭はれ出づれば

悶絶し、『ウン』とのつけに反り返れば

二匹の小蛇は抜け出でて、檀に立てたる幣帛に入る

よと見へしが忽ちに

この世を去りし桜丸夫婦が姿と現はれ出で、影の如く檀上にすつくと立ち

「腹立ちや恨めしや。汝故に菅丞相無実の罪に浮

き沈み、心筑紫に果て給ふその怨念は晴れやら

ぬ。空に轟き鳴神の炎変じて、紅桜と共に散らさ

ん、来たれや来たれ」

と頭を掴んで引立つる。

音に驚き法性坊、紫宸殿に駆け出で見給へば

物の怪の姿はありく、有明桜

「祈り加持して退げんずもの」

と数珠さらりと押し揉んで、千手の陀羅尼くりか

けく祈り祈れば

時平は、夢とも現とも思はず知らず立ち上がり、逃げんとするを

『逃さじ』と向ふに忽ち八重一重

「いかに僧正、祈る共この怨念はいつまでも付きま

とはつて糸桜、逃し放れじ幻は打て共去らぬ犬桜」

「ヤアく僧正、菅丞相を讒言し帝位を奪ふ時平

を助け給ふは心得ず。さては貴僧も朝敵に力を添

へ給ふか」

と聞くより僧正大きに驚き

「ヤアかゝる天下の怨共知らで、数珠を汚せし勿

体なや」

と法座を立ち去り入り給へば

時平も恐れ諸共に、御座の間差して逃げ入るを

髻を取つて引き戻し

「今こそは思ひの儘、冥途の闇路に伴はん」

と桜の笞を振り上げ追立てく追ひ廻し、笞を持つ

ててうくく

打たれて現空蟬のも抜けの体

「さてこそ恨み晴れたり」

と死霊は時平を庭上に、どうぞ蹴落とし嬉しげに、

形は花の散る如く消へて見へねば

丞相の霊も鎮まり空晴れて、日輪光り輝けり

かくと見るより菅秀才

苜屋姫

庭上に走り出で

「父上の敵逃さじ」

と用意の懐剣抜き放し

「恨みの刀思ひ知れ」

と刺し通しく悦び給ふ折こそあれ

法性坊親王を伴ひ立ち出で給ひ

「人々の願ひの如く、菅秀才には菅原の遺跡を立

てさせ、菅丞相には正一位の贈官あり。右近の馬

場に社を築き、南無天満大自在天神と崇め皇居の

守護神たるべしとの宣旨なり」

と述べ給へば

皆一同に悦びを聞くに北野の千本松、栄へ栄へる御

社は千年万年朽ちせぬ宮殿、栄へましますこの御神、縁起をあらく書き残す、筆の冥加や御伝授の、伝ふる和国に著き威徳を崇め奉る